

K2A-24

Z32-B88

大正十二年四月六日印刷 大正十二年五月一日發行

# 金の星

号五才 号月五 卷五才



国立国会  
8. 3. 26  
図書館

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 inches 1 2 3 4 5 6 7 8





坊ちゃん、嬢ちゃんと  
一番仲よしの松坂屋

- お休みの日にはぜひお遊びにおいで下さい
- ◇玩具も、文房具も、運動用具も
  - ◇素敵に格好のよい子供洋服も
  - ◇面白い雑誌や為になる御本等
- 澤山取揃へてございませう
- その上四階には特に皆様方の為めに「児童遊戯室」があつて自由に愉快に遊ばれます

店服呉うとい屋坂松

(野上・京東)

カルピスは味のオーケストラ!!  
一杯のむさ  
舌がダンスを始めます。

顧問 三宅 誠一 理学博士  
販売所 酒店・食料品店・薬店



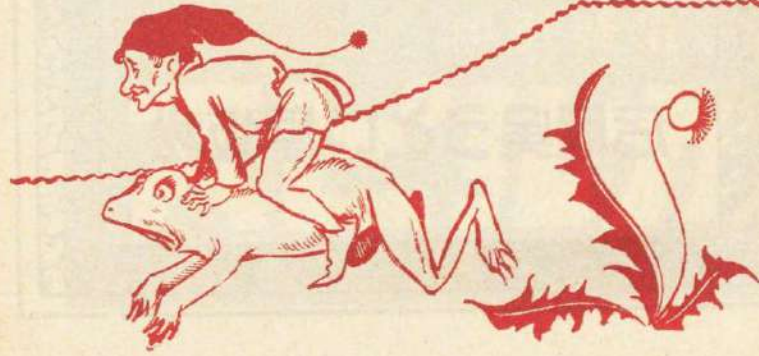
料飲強滋

スピルカ



目次

胡蝶のやうに(表紙・原色版) ライネツケの上産(口繪・三色版)	岡本 歸一
山彦(童話)	四 野口 雨情
同作曲	二 本居 長世
身代り(童話)	六 沖野岩三郎
舞踏に懲りた悪魔(童話)	三 畑 耕一
西班牙の山賊(長篇童話)	三 西條 八十
たろさんの足袋(童話)	六 若山 牧水
狐の裁判(長篇童話)	三 小島政二郎
蟹の仇討(少年自作童話)	元 荒 木 脩
小雀の恩返し(少年自作童話)	四 林 田 三 男



南京の夢(童話)	四 柳井 正夫
水滸傳(長篇長話)	吾 宮島 資夫
謀叛人の子(史譚)	五 霜田 史光
若き巨人(童話)	六 馬場 孤蝶
おびんづるさん(童話)	四 野口 雨情
仙臺と福島より(講談部報告)	六 沖野岩三郎
夜廻り(童話)	六 野口 雨情
山びこ(幼年詩)	三 若山 牧水
人物(自由書)	三 山本 鼎
周々の死(綴方)	三 編 輯 部 選
通信	六
讀者だより	六



長篇物語 **鈍栗山** (第四回) 沖野岩三郎  
 挿畫 紅い林檎 岡本 歸一  
 水島爾保布

(附 録)

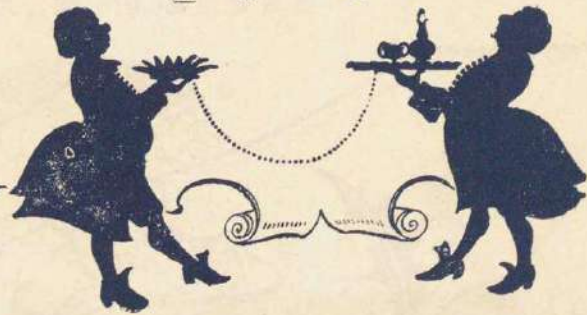




ライネツケの土産土産 岡本諦一畫

大王は羊のペリンがさし出した頭陀袋を、い  
そいで開けさせてごらんになると、寶ものと  
思ひのほか、ランプ(兎)の首だったので、  
『おのれ、このペリンめ。よくも朕をだましを  
つたな。誰かある。ペリンめを牢へぶち込め』  
とお命じになりました。

『狐の裁判』の三〇頁を御覽下さい。





米本書店の童謡書目

雨情先生序 黒田正著  
**童謡教育の實際**

一定送 一圓二錢 一圓六錢

説く處必ず實際と理論との、そのない縫ひ合せであつて、省察に富んだ経験的な陳述は、今日適所に迷つて居る多くの童謡教育當務者にとつて頗る必要な参考書であると共に、童謡研究家並に童謡教育の何たるかを知らんと欲する一般父兄の必ず一讀を要する好参考書である事を疑ひません敢て小學校教師と父兄に勧む。

課外の可愛らしき  
物讀み 童謡のお話と劇

價七十錢 送料六錢

雨情先生はこの書に序して子供の爲めになるよ一本です。

正午社編

從書 影繪のお國

一定送 一圓二錢 一圓六錢

野口雨情、西條八十、北原白秋、三木露風、山村暮鳥、西川勉、藤森秀夫の諸先生の御寄稿を得て、日本の童謡會同人、同社の同人等が、若き同志を糾合して作つた敢て世に問ふ童謡集です。「童謡に面する心」童謡私観の二論文と童謡に關する二百餘種の圖書總覽を入れてあります。

雨情先生序 松波霞洋著  
童謡と 玉蟲と人形

一定送 一圓六錢

露谷虹兒先生の表紙繪  
きれいな童謡の本の中には童謡の曲と色々な童謡畫が澤山あります。

兒童童謡 ゆきぼと

一定送 一圓七錢 一圓六錢

可愛らしい子供さん達のほんたうの心から出た童謡の傑作集であります皆さんはきつと「ゆきぼと」しよりと御上手でせう、繪が澤山あります。

若柳小學校 蝙蝠の唄

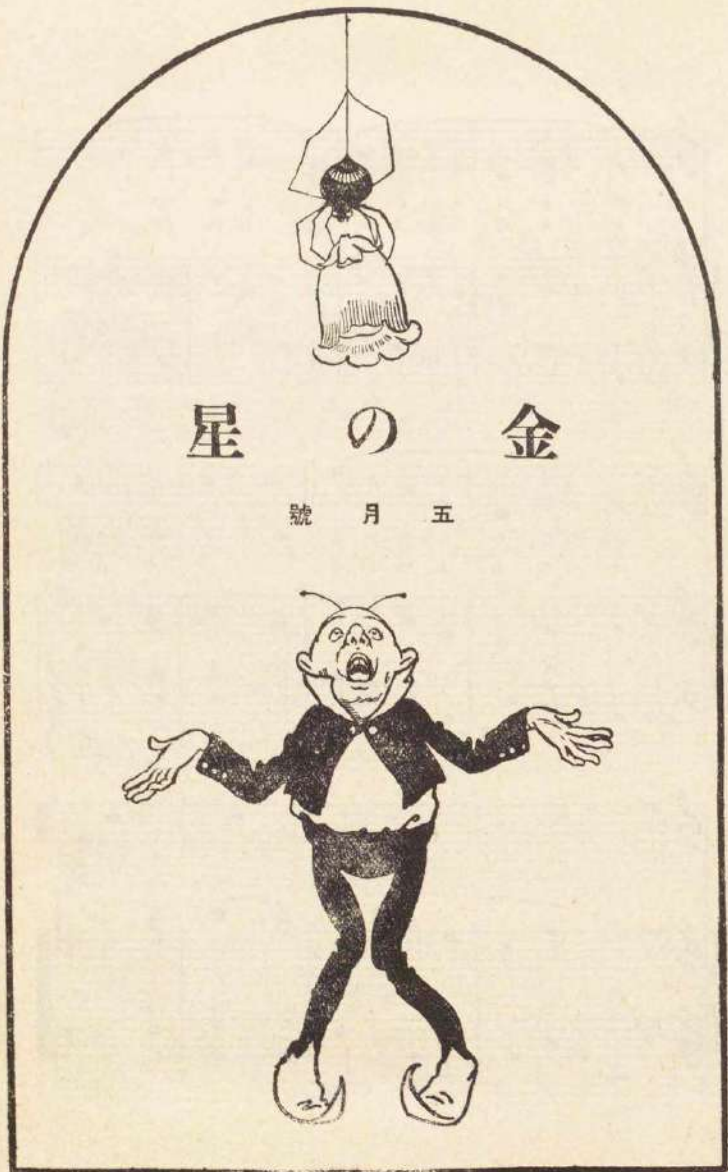
價九錢 送料六錢

藤田新作 銀のつぼ

價九錢 送料六錢

發行所 東京市東區神田五丁目三番 米本書店



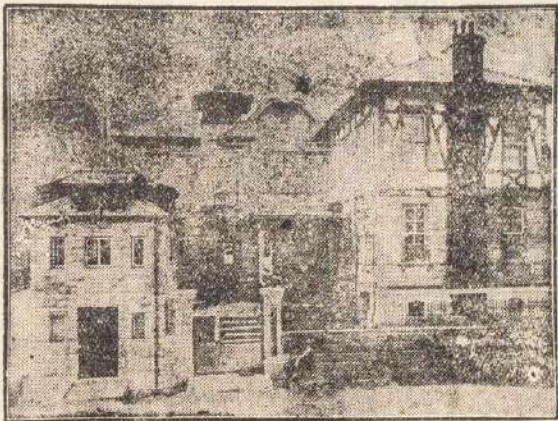


天下の青年は 何故に争ふて **大日本國民中學會に入會する乎**

- 講義が新しいから
- 會費が廉いから
- 指導が良いから
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が愼だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 遠藤隆吉  
 新學博士 山内繁雄  
 顧問 井上博士 三宅博士  
 岡田前交務大臣



創立以來二十一年 記念大特典提供 **入會の絶機**

目下新學期開講

講義録見本つき  
 規則書無料進呈

一人前の男となるには どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競争の勝利者たることは六ヶしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンネルと出來てゐる。それは創立以來二十年の古い経験のある講義録で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京駿河臺(お茶の水電車通り)  
**大日本國民中學會**  
 振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇二  
 神田三〇〇三 神田三〇〇四



山彦

本居長世作曲

*Allargatto*

Musical notation for the piano introduction, featuring a treble and bass clef with a key signature of two flats and a 3/4 time signature. The tempo marking 'Allargatto' is written above the staff.

Lyrics: やまにやまびこ ーイ ーイ  
かはにかはせみ かはせみ

Musical notation for the first line of the song, including vocal line and piano accompaniment.

Lyrics: よんても よんても ーイ ーイ  
よんても よんても ーイ ーイ

Musical notation for the second line of the song, including vocal line and piano accompaniment.

三

Lyrics: やーまのおほしさんはなれほーし  
かはらのおほしさんはなれほーし

Musical notation for the third line of the song, including vocal line and piano accompaniment.

Lyrics: まつても まつても ホイホイ  
まつても まつても ホイホイ

Musical notation for the fourth line of the song, including vocal line and piano accompaniment.

Lyrics: (Blank)

Musical notation for the fifth line of the song, including vocal line and piano accompaniment.

二





ホーイホイ

河は 翡翠

河雀

呼んでも 呼んでも

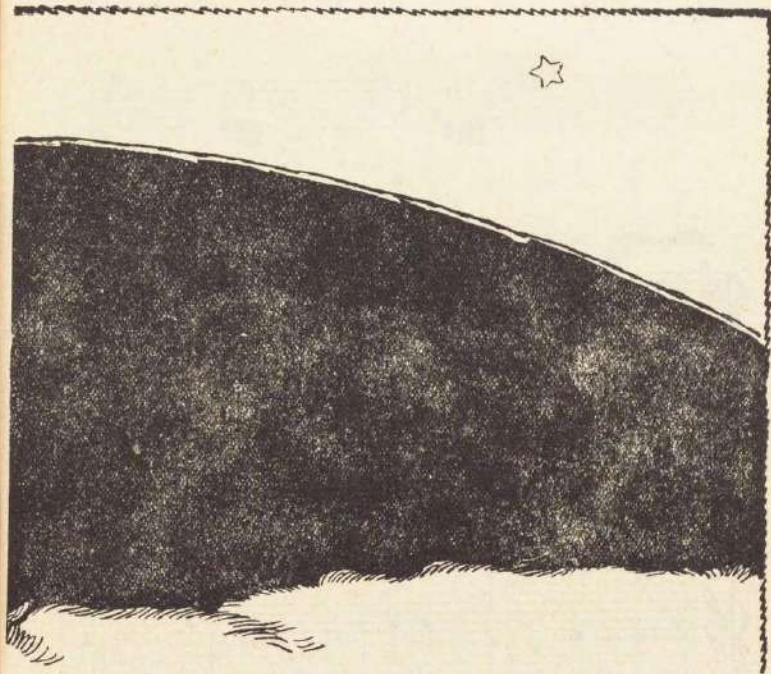
ホーイホイ

河原の お星さん

はなれ星

待っても待っても

ホーイホイ



山彦

野口雨情

山に 山彦

ホーイホイ

呼んでも 呼んでも

ホーイホイ

山の お星さん

はなれ星

待っても 待っても



# 身代り 沖野岩三郎



い。「と言つて、お父様は良伯を其のま、遊ばせて置きました。所が八歳になつた時、良伯は、また學校へ通ふのはイヤだと申しました。おッ母さんは、何とかして早く學校へ入れて勉強させたいと思ひましたが、お父様は、

「怠がないでもない、そんなに嫌がるものを無理に學校へやつた所で致方がない。では來年から通學させたら宜からう。」と申しました。

或所に一人の大名がありました。五十歳になつて、始めて男の子が産れましたので、大變に喜んで、良伯といふ名前をつけて、大事に育てました。

良伯が七歳になつた時、お父様は良伯を學校へ入學させようといたしましたが、良伯はイヤだと申しました。

「さうか、よしよし。それでは來年から通學するやうになさ

た。良伯が十二歳になつた春の半頃、おッ母さんは、良伯を枕邊に呼んで、どうぞ學校に入つて、勉強して偉い人になつて下さいと、くれんぐも言ひ置いて亡くなりました。けれども、其時はもう、良伯は遊び癖がついてしまつて、どうしても學問をする氣には、なれなくなつてゐました。

そこでお父様も、始めて大層心配し出して、どうかして良

伯を學校にやらうと、いろいろ、骨を折りましたが、良伯はどこまでも、學校を嫌がつて、お父様の言ふ事を聞入れませんでした。

隣の町に海印寺といふ名高いお寺がありました。其所には大變學問の深い大和尚がゐりました。

或日の事、その大和尚は大名の所へ来て、

「あなたの息子さんは、十三歳にもなるのに、まだ、片假名も書けないさうですが、それではお困りでせうから、その教育を私にお任せ下さいませんか。」と申しました。

大和尚の名前は、かねん、聞いてゐましたから、大名は大變喜んで、

「あの子は、私があんまり可愛がり過ぎましたので、持ちも提げもならない、厄介な子になつてしまつたのでございませう。今日から私は、あの子を無いものだと思ひますから、どうか、あなたの所へ伴れて歸つて、打つても蹴つても殿つても宜しうございませうから、十分に御教育下さいませうにお願ひ致します。」と言つて、息子の教育を、涙を流しながら頼みました。すると、大和尚は、

「宜しうございます。私は引受けて、屹度偉い人間に致してみませう。」と言つて、其日の夕方、良伯を伴れて海印寺へ歸つて行きました。

良伯は山へでも遊びに行くやうな氣分です、大和尚と一緒に海印寺へ行つてみますと、お寺には多勢の小僧さんがゐりました。そして其の小僧さん達は、良伯の來たのを見て、

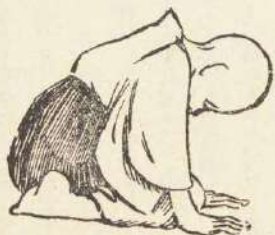
「おい、なまけ者の良伯、今日からは、僕達と一緒に働くんのだぞ。どうだい、水が汲めるか汲んでごらん」と申しました。それを聞いた良伯は、

「失敬な事を言ふな。僕は大名の息子だぞ」と言つて小僧さん達を叱りつけました。けれども小僧さん達は、

「大名の息子であらうが何であらうが、此所へ來れば此所の弟子だよ。弟子のうちで、お前は一番後から來たんだから、僕達上級生の言ひつけを聞かなければならぬんだよ。」と言つて、無理やりに、良伯に水を汲ませました。

良伯は腹が立つて、腹が立つて致方がないので、早速お家へ走つて歸らうとしましたが、多勢の小僧さん達は、無理に良伯をお寺の中へ引張り込んでしまひました。





お夕飯を食べます時、良伯はお茶碗の中にある食物を見ますと、それは彼が産れて以来、まだ一度も見た事のない、妙な黒いものでしたから、

「これは何ですか。」と尋ねますと、大和尚は、につこり笑ひながら、

「これは私達の食べる御馳走です。あなたは、今晚から毎日此れを食べなければなりませんよ。」と申しました。

御馳走だと聞いたので、良伯は箸を取つて食べて見ようと思つたか、どうして、どうして、それは良伯のやうな贅澤に育つた者には、一口だつて食べられるものではありませんでした。で、其晩は何にも食べないで寝ましたが、翌朝になると、はやくから打き起されて、水汲、掃除、雑巾がけをさせられました。

嫌だと言へば、ひどい目にあふので、致方なしに言ひつけられる通りに働きましたが、矢張り御飯は喉を通りませんでした。けれども其日の正午頃になると、もうお腹が空いて、どうしても我慢がし切れなくなつて、其の不味い御飯を一膳だけいたゞきました。夕飯時には二膳いたゞきました。翌る

朝になると、他の小僧さん達と同様に三膳いたゞくやうになりました。さうして三日四日を其所で過しましたが、或日の事大和尚は良伯を一室へ呼んで、

「私は、あなたのお父様から、あなたを打つても蹴つても殴つても、どうしても宜いから教育して呉れろと頼まれたのだから、あなたが私の命令を聞かないなら、私はどんなにひどい事をするかも知れません。」と言ひ聞かせました。けれども良伯は、自分が大名の息子だといふ事を自慢に思つてゐましたから、心の中では、

「うんと僕を虐めて置け、今に僕がお父様の後を相續して大名になつたなら、兵隊を伴れて来て、此のお寺を焼拂つて、僕を苦しめた小僧達を皆な討殺してやるから。」と考へてゐました。所が、お父様の大名からは、時々お使いが来て、

「良伯は、打つても蹴つても殴つても宜しいから、十分に教育してやつて下さい。若し逃げ歸るやうな事があれば、其ままには差遣きませんから。」と申しました。だから良伯は嫌で嫌で致方がなくても、毎日々々不味いものを食べさせられて廣い／＼お寺の内外を隅なく掃除させられました。

半年程経ちました時、良伯は、ふと、今まで自分が勉強しなかつた事を悪かつたと思つたので、大和尚の前へ行つて、

「大和尚様、私は大變な考へ違ひをしてゐました。今日からすつかり心を入替へて、一生懸命に學問を習ひますから、どうぞお教へ下さいまし。」と言つて、涙を流しながらお詫びを申しました。そこで大和尚は御自分で、良伯に片假字のナイウエオから始めて教へる事にいたしました。

教へてみると、良伯はなかく賢い物覚えの善い子でした。良伯も習つてゐるうちに、學問が大變好きになつて、十八歳の年には、もう日本の書物も支那の書物も大抵讀み盡してしまふ程に、よく勉強いたしました。そこで大和尚は良伯に對つて

「もうそれ位、勉強したなら、お父様の後を嗣いで、大名になつても、この國はよく治めて行く事が出来るでせう。しかし大名になつても決して百姓達を輕蔑したり、人民を苦しめてはなりません。」と懇々と言ひ含めて家へ歸らせました。

五年目に歸つて来た良伯を見たお父様は、大層喜んで、いろいろ學問の事や政治の事を尋ねてみましたが、もう其時良



伯は、お父様よりも、ずつと偉い學者になつてゐましたので、お父様も吃驚してしまひました。

それから二年の後に、お父様の大名が病氣で亡くなられたので、良伯は、其の後を嗣ぐ事になりました。すると將軍家から、良伯に權少納言といふ、えらい官名を與へられました。で、良伯は直ぐに其事を海印寺へ知らせますと、大和尚は使と一緒に良伯の所へ来て、お祝ひを申し上げました。そして、

「私は、あなたをかうした名高いお方にしてあげたい。ばつかりに、不味いものを食べさせたり、打つたり殿つたりしたのでした。けれど、どうぞ今までの事は悪く思はないで下



私は、或國の大名に頼まれ



權少納言良伯を殺して、

此國を奪はうと企てました。そして昨夜、その寢室へ忍び込んで唯一突きに良伯の胸板を蒲團の上から突刺しますと蒲團を撥ね上げたのは、良伯ではなく、海印寺の大和尚でした。大和尚は私に刺されながら、小さい聲で「權少納言良伯は謙遜な心をもつてゐる實に善い大名です。あの人は位は高くとも、百姓町人と同じやうに、不味い物を食べて、

さい。」と嬉し涙をこぼしながら申しました。良伯も大和尚の手を取つて、

「私は決して、あなたに對して、そんな事を思つてはるません。私は心の底から、あなたを尊敬してゐます。御教育下さいました御恩を深く感謝してゐます。」と申しました。

それから良伯は大和尚を懇ろに敬待して、二人は一つの室へ枕を並べて寝みましたが、どうしたものが、其晩は其の室の中が變に蒸暑くつてやりきれないので、夜中頃良伯はそつと起きて隣の室へ行つて寝ました。

所が、朝がたになつて、良伯は大和尚の寢んでゐる室へ歸つて來ますと、これはまア、何といふ事ぞう。大和尚は血まみれになつて刺殺されてゐるのでした。

良伯は吃驚して室内を調べてみました。自殺らしくは思はれませんので、直ぐさま家來に命令して、町々村々を取調べさせますと、村外れの松林の中に、一人の武士が切腹してゐました。

どうした事だらう！と思つて檢べてみますと、其の武士は一通の遺書をもつてゐました。それには、

朝から晩迄一生懸命に働く立派な人です。と申されました。大和尚の言葉聞いた私は、大變悪い事をしたと思ひました。そんな立派な大名を殺さうと企てた事、それから罪なき大和尚を誤つて殺した事を此上もなく後悔いたします。と書いてありました。

良伯はそれを讀んで、海印寺の大和尚が、自分の身代りになつて呉れた事を、大層悲しむ乍ら感謝致しました。で大和尚の遺骸をお父様のお墓の側へ丁寧に葬りまして、國中の人民に、  
「今日から、此國の人民は、此大和尚のお墓を自分の殿様だと思つて尊敬して下さい。私はあなた方が一緒に一生懸命に働きますから」といふ御布令を出して、初めて海印寺へ行つた時食べたと同じ様な、真黒い不味い、而も滋養のある物を食べて、朝から晩迄必死になつて働きました。すると人民は皆な、  
「大名の良伯様は、私共の一番親しいお友達です。」と申しました。良伯少納言はいつも、

「私の一番親しいお友達は、朝から晩まで、私と一緒によく働く此國の人民達です。」と申しました。



# 舞踏に懲りた悪魔

畑 耕 一



むかし、歐羅巴の東の或る國に、カッチャといふ女がありました。かの女は、うまれつき意地悪で強情で、いちど自分が、こうしようと思つたことは、それが、どんなに人の迷惑になることであらうと、また、どんなに自分が、人から嫌はれる種となることであらうと、あくまでしつこく、づうづうしくやりとほすわるい癖をもつてゐましたから、四十の年齢になつても、御亭主になつてくれる者がなればかりか、彼女のすんでゐる村の人たちからも、ひとりのけものものにされて、憎まれきつてゐました。

無邪氣な子どもでも、彼女の姿を見ると「やあい、意地わるのカッチャ、やあい」と、罵つて逃げ出しました。犬も彼女の姿を見ると、すぐ牙をむき出して吠えたて、猫も彼女の姿を見ると、フウ！と脊なかをまるくして怒り出し、鳥で

さへも、彼女の姿を見ると、「カアカア、カッチャの強情女、いつしよに遊んでやらないぞ！」と、嘴をならしてあざけりました。

けれどカッチャは、どこまでも平気で、「馬鹿！ お前たちなんかに、相手になつて貰はなくたつて、このカッチャさまひとりで、澤山だあ。」と、へらず口をたゝいてゐましたが、二つだけ、彼女に、相手がほしくてならない場合がありました。それは、お酒をのむ時と、舞踏をする時とでした。彼女は、お酒と舞踏が、なよりの好物でしたが、これは誰か相手がるないと、まつたく張りあひがなくて、困ることなので、これには、さすが強情の彼女も、よほど閉口してゐました。村の酒場などへはひりこんで、お酒をのんでゐるうちに、踊りたくて踊りたくて、たまらなくなると、彼女は、そこで愉快に舞踏してゐる、幾組もの男女のなかへ、

「おい、わたしも仲間に入れておくれよ。」と、割り込まうとしました。

「いけない、いけない。この村に——いや、この國ぢうのど

こにだつて——カッチャの相手になる者があるもんか！ 駄目だ、駄目だ。あつちに行つちまへ！」

舞踏に夢中になつてゐる男も女も、彼女がちかづくくと、靴をあけて、蹴飛ばさうとしました。すると、カッチャは、「へん、お前たちに、相手になつてもらはなくても、いゝやい。馬鹿！」

と、きつと、敗ぬ氣になつて、罵りかへすのが常でした。——或る晩のこと、カッチャは、村の酒場の椅子に腰をおろして、例のとほりがぶがぶお酒をのみながら、そこに踊り狂つてゐる、男女の群を見ました。彼女は、きつきから、もう踊りたくて踊りたくて、たまらなくなつてゐたのですが、踊らうとしても、きつと相手になつてくれる者がなといふことを、知つてゐるので、強情な彼女は、みんなを馬鹿にしました。——が、たうとう、我慢がしきれなくなつて、椅子から立ちあがりながら、

「あゝ、かうなつちやあ、悪魔でもいゝから、わたしといつしよに、思ふ存分踊つてくれないかな。」と、つぶやきまし



た。

すると、その途端に、酒場の扉をガタンとあけて、丈のたかい、眼のギロリと大きい、褶々をつた黒い服をきた見馴れぬ男が、ぬつとはひつて来ました。

「おい、カッチャ。おれと踊らう。」

その男は、無遠慮に、カッチャのそばへ近づいて、いきなり握手しました。

「お前は、誰だい？」彼女は、ちよつと驚いて、その男の顔を見ました。

「誰だつてい、じやないか。おれはお前と踊らうと思つて、親切に出て来てやつたんだ。」

「おや、わたしといつしよに、踊つてくれるのかい。」と、カッチャは、意地悪るけに、薄笑ひしました。「踊つてくれるのは、ありがたいが、お前は、わたしが、飽きたといふまで、踊りぬいてくれるかね？　ちよつと踊つて、疲れたからやめるといふのでは嫌だよ。それなら、はじめつから、踊りの相手になつて貰はないほうがい、んだよ。」

「大丈夫。お前なんかと踊つて、へたばるやうなおれじやな

敗けず踊りつゝけましたが、さすがにすし疲れたらしく、

「おい、お前はよつほど舞踏が好きなんだな。感心したよ。

だが、もう、だいぶ夜が更けたやうだから、どうだい、今夜はこれでおしまひにして、また明日の晩、このつゝきを踊る



つてえことにしようじやないか。」と、いひました。

「いやだよ！」と、カッチャは、意地悪るけに首を振りました。「わたしは、まだ、踊り飽かないのだよ。お前は、はじめに、踊るくらゐのことには、へたばらないつて、威張つたじやないか。——お前はわたしに、降参したのかい。」

いよ。」と、その男は、いかにも高慢らしく笑ひました。「お前がさきに踊り飽きるか、おれがさきに降参するか、踊つて見ればわかることさ。」は、ハ、ハ、ハ、

「よし！　それなら、さあ、いつしよに踊らう！」

強情なカッチャは、すぐその男と組になつて、踊りはじめました。一時間——二時間——彼等は酒場のなかをグル／＼踊りまはりました。三時間——四時間——カッチャは、意地になつて、踊りつゝけました。そこに踊つてゐる男女たちは、踊り疲れて、すつかり酒場から歸つてしまつても、この一組は、グル／＼、グル／＼、息もつがずに踊りまはりました。

「もし、もう夜をそくなりしましたから、店をしまひますがね。」と、酒場の亭主は、迷惑さうにいひました。

それでも、強情で意地悪なカッチャは、踊りをやめようとは、しませんでした。亭主は、たうとう怒つて、踊つてゐる兩人を扉をあけて、家外へ、つき出しました。が、カッチャは平気で、酒場の前の、暗い花園で、そこに植ゑてある草や花を、めちやく／＼に踏みちらしながら踊りました。丈のたかい男も、なかなかの強情者と見えて、カッチャに

「降参なんかするもんか。」

「では、わたしが、やめようといふまで、お踊りよ。」

「だが、ちよつと疲れたからな。」

「そんなら、降参かい。」

「降参なんかする、おれじやないぞ。」

「ふん、卑怯者！　降参でなきや、わたしといつしよに踊らないか！」

かう彼女が罵ると、丈のたかい男は、暗い闇のなかにも、急に大きな眼を、ギロ／＼光らせて、彼女を睨みつけました。



そして、地の底へも響くやうな、おそろしい聲でいひました。

「おい、カッチャー！ 生意氣いふときかないぞ！ このおれを誰だと思ふ？」

「ふん、誰だか——卑怯な馬鹿といふ名のほかに、なんといふ名だか、知るもんかい！」

「おれは、さつきお前が、踊つて貰ひたいと、ひとりごとをいつた、その、おそろしい悪魔だぞ！ 高が人間のお前なんぞに、降参することがあるもんか！」

丈のたかい男は、さういつて、からだをビリッとするはせたかと思ふと、たちまち、額に一本の角のある、口の耳まで裂けた、おそろしい悪魔の姿をあらはしました。それに、アツと驚いて逃げ出すかと思ひのほか、カッチャは持ち前の強情を、いよく發揮して、

「なに？ 悪魔ならなほ面白い！ さあ、人間のわたしと踊りの根くらべをして見ろ。」と、意地になつて、悪魔の襟もとに、しがみつきました。

悪魔も意地になりました。「よし、そんな生意氣いふなら、踊

ました。

その聲をきいて、駆けつけたのは、この近くの沼のほとりに住んでゐる、流師でした。彼は、なにことだらうと、そばへ寄つて見ると、おそろしい悪魔が、カッチャと踊つてゐるので、びつくりして逃げ出さうとしました。

「おい、流師さん。助けておくれよ。おれはこの女にとつ、かまつて、ひどい目にあつてゐるのだ。もしお前がおれを助けてくれたら、そのお禮に、おれはきつと、お前をこの國の一番の、大金持にさせてあげるよ。どうかおれを、助けてくれ！」

悪魔は、ヒイ／＼息をきらせながら、哀れけな聲をだして、たのみました。流師は、二度びつくりをしました。——助けの叫びをあげたのは、カッチャだと思つてゐたのに、さうではなくて、おそろしい悪魔のはうだつたからです。

「どうしたんです。悪魔さん。」彼は、それでも、びく／＼しながらききました。

「いや、どうもかうもない。この女は、思ふ存分踊るのだといつて、おれをとつ、かまへて、離さないのだ。あ、おれは

つて踊つて踊りぬいて、こいつを死ぬほど苦しめてやらう。」と、彼は押しふせるやうに、カッチャの手をとつて、こんどは、一層はけしく、グル／＼、グル／＼、踊りだしました。カッチャも、どこまでも強情を張つて、ちつとも弱らず、平氣で踊りつゝけました。

——そのうち、たうとう、悪魔のはうが、閉口してしまひました。

「あ、わかつたわかつた、降参だ降参だ。もう、踊りはやめにしよう。」と、彼は、せいせい息をはずませながらいひました。

「なに、今になつて降参だといつて、ゆるしてやれるもんかい。悪魔だつてなんだつて驚かないんだ。わたしは、まだまだ踊るんだ！」と、カッチャは、いよく強情に、悪魔にしがみついて離れようとはしませんでした。

「あ、大變な奴にとつ、かまつた。おれは今まで、こんなおそろしい人間に、でくわせたことがない。あ、困つた……誰か来て、助けてくれ！」

悪魔は、苦しみのあまり、意氣地なく、こんな悲鳴をあげ

息がきれて、足がくたびれて、死にさうだ。その女を、おれから離しておくれ。……助けておくれ。」

「よろしい。では、この強情女を、ひき離してあげよう。そのかはり、お禮として、きつとわしを、大金持にさせてくれるでせうね。」

「それはきつと大丈夫だ……さあ、はやく離して……助けて……！」

「よろしい。」と、流師は、勇氣をだして、悪魔とカッチャの間へ、飛びこみました。そしていひました。「おい、カッチャ！ そんなに踊りたいなら、人間のわしが相手になつてやらう。踊りといふものは人間同士でやるから面白いのだよ。」

「おや、お前が相手になつてくれるのかい。わたしはまだ、人間を相手に踊つたことがない。そいつは、ありがたい！」カッチャは、よろこんで、悪魔の襟から手を離し、すぐ流師にしがみついて、踊り出しました。

その間に、悪魔は、あわて、後をも見ずに逃げてゆきました。

流師は、カッチャと、しばらく踊りつゝけてゐましたが、



彼女がどこまでも強情に、瘦れた顔もせず踊るのを見て、「なるほど、こいつは、悪魔でも閉口するわい。」と、思ひました。で、彼は、心のうちに、或る計略を考へて、踊りながら、だんだん沼の方へ、カッチャをひつばつて来ました。カッチャは、漁師から離れぬやうに、片手でしつかり袖をつかみ、片手を漁師の襟にかけて、グルグル踊りまはりました。

沼のそばまで来ると、漁師は夢中になつて面白げに踊るやうに見せかけ、實は、そつと片手を上着の釦にやつて、それを、ひとつひとつカッチャに氣づかれぬやうに、はづしてしまひました。そして、隙をうかやつてバツと身體をひねると、すほりと上着がぬけて、カッチャの手にのこり、自分はずまく、彼女の手からのがれることができま



した。漁師は、彼女を沼のなかへ突き落して、ドン／＼逃げて歸りました。さが強情な彼女も、これにはまつたく膽をぬかれて、沼から這ひあがると、漁師のあとを追つかけようとせす、つぶぬれになつた身體を、寒むさうにふるはせながら、ブツ／＼口のなかで、怒つてゐるばかりでした。……

あくる朝、漁師が家で眼をさますと、なにか書いた紙片が、寢床の枕もとに置いてありました。取りあけて見ると、それは、昨夜助けてやつた悪魔からの、お禮の手紙で、そのおしまひに、こんな言葉が書いてありました。

——おれは約束どほり、お禮として、お前をこの國一番の大金持にしてやる。

それは、これから十日目の晩に、おれはこの國の都の王

さまのお城へ行つて、王さまの二人の姫のうら、妹の姫をひつさらつて逃げる。きつと多勢の家來が、おれを追つかけるだらうが、おれの足は人間の百倍も速いから、追つ、くことはできない。その時、



目にあふよ。——なるほど、かうしてお禮をするつもりだつたか。悪魔はどこまでも悪魔らしいお禮のしかたをするものだな。」

お前が飛び出して、「沼の漁師がお見舞だぞ！」と高く呼べ。さうすると、おれはびつくりしたやうな顔をして、妹の姫を棄て、逃げるから。

で、お前は、その褒美として、王さまから、きつと、國一番の大金持になれるほどの、たくさんのお金をもらへることになる。

だが、それからまた十日目の晩、おれは、姉の姫をひつさらつて逃げる。これは、追つかけても駄目だよ。なぜなら、おれは、その姉姫を、おれのお嫁にするために、連れて歸るのだから。この時、もしお前が邪魔でもすると、お前は氣の毒だが、だじな生命を失はねばならないやうな

で、ちやうど十日目の夜、都の王さまのお城の門までやつて来ました。

彼は、そこで、一時間待つか待たぬうちに、たちまち、お城のなかに、恐ろしい女の叫び聲が起つて、つゞいて投げ鎗を投げつける音やら、馬の用意をする音やら、多くの人々の足音やら、大騒ぎがはじまりました。

「さあ、やつたぞ！」と、漁師は、身構へしました。門からバツと悪魔が、美しい小さな妹姫さまを抱へて風のやうに飛び出しました。多勢の家來が、馬に乗つて、劍や槍をかざしながら追つかけてきましたが、見る／＼彼等は悪魔のうしろに、遠く、とりのこされてしまひました。漁師は、こゝ



だと思つて、大音聲に、門のわきから叫びました。  
 「悪魔、悪魔、逃がしはせぬぞ！ 沼の漁師がお見舞だぞ！」  
 悪魔は、抱へた姫さまを、そつと地に置いて、逃げて行つてしまひました。

その妹姫さまが、漁師の一聲で助かつたといふことを聞かれた時、王さまのおよろこびは、たいへんなものでした。漁師は、すぐに王さまの前へ召し出されて、ほんたうに、國一番の大金持になれるほどの御褒美をいただきました。



②

「この男は、悪魔を吐りつけた、えらい勇士じや。こんな勇士を、わしは婿にしたいと思ふ。」と、王さまは感心しながら仰りました。

そして、まったく思ひがけないことに、漁師は、王さまの、美しい姉姫さまの婿になることになりました。漁師は夢かたばかりよろこびました。が、すぐ、彼は恐ろしい、悲しみにうたれました。なぜなら、これから十日後の晩に、悪魔は、自分のお嫁にするため、この姉姫さまをひつさらいに来ることが、彼にはよくわかつてゐたからです。そして、こんどは、「沼の漁師がお見舞ひだぞ！」も、効験がないといふことを、よく知つてゐたからです。

漁師——いや、今では立派な、姉姫さまの婿さま——は、毎日、悲しみに沈みきつてゐました。姉姫さまは、良人になにか深い心配のあることを、さとも、氣づかれました。それで、いろいろその譯をたづねられましたので、この新しい婿さまは、遂に、いつさいのことを、包まず姉姫さまに、うちあげました。姉姫さまは、ちよつと考へてゐられました。が、やがて、



「そんなことは、べつに心配することはありません。わたしに、いゝ工夫があります。」と、なにか、そつと、婿さまに耳うちされました。婿さまは、ニッコリ笑つてうなづきました。十日目の晩になりました。果して悪魔が、お城のなかへ入つて来ました。

「おい、お前はよくも、おれがお嫁にしようと思つた姉姫の婿になつたな。さあ、どうするか見てゐろ！」

悪魔は、例の大きな眼で、ギロ／＼と新しい婿さまを睨みつけました。

「いや、この女がほしければ、今すぐにでも連れていらつしやい。わたしは決してそれを邪魔したりしはしませんよ。」と、婿さまは、いかにも落ちつき拂つた調子でいひました。

「ほんたうにこの女は、こんなに美しくつて、あなたのお嫁さんには、ちやうどいゝと思ひます。それに、この女の舞踏のすきな事といつたらたしかに世界一で、一度踊りだすとひと月でもふた月でも食事もしないで踊りつゝけるのです。——さうです。あの、カッチャでも、この女ほどには踊れますまい。」

「えへつ……！……あの、カッチャでもかなはなない踊り好だつて……！……あの……カッチャでも！」  
 かういづゝ悪魔は、身體をガタ／＼ふるはせはじめました。そして、ころぶがやうに、窓から飛び出し、いづくともなく、夢我夢中に、逃げて行つてしまつて、それから再びお城に近つかうともしませんでした。

新しい婿さまと、姉姫さまとは、お城ぢうの家來の尊敬をうけて、ながく／＼仲よくお暮しになりました。(なはり)





## 西班牙の山賊 西 八 條

### 七、男泣きに泣いたよ

樅の樹から吊さがつた長靴の中が空でなく、たしかに人間の足が入つてゐるのだと気がつく。同時に、僕には前後の様子が何もかもわかつた。なぜ靴が釘づけにされてゐるのか、またなぜ火が樹の下で焚かれたかと云ふのこらすの理由が！

この邊の話はあんまり委しくすると、諸君が今夜夢でうなされてもするといけないからい、かけんにして置かう。まつたく西班牙の山賊どもがどれほど唐たらしいことを平氣でやるかと云ふことは、實地に見た人でなければわからぬのだ。とにかく僕にはこれでヴァイタル少尉の馬が何故主も無く森の空地にながれてゐたかそのわけがはつきりわかつたと云ふことだけを述べて置かう。それにしてもつい今朝がたまで元氣な武者ぶりを見せてゐたあの哀れな少尉が

悪鬼のやうな山賊どもの、しかも聞くらおそろしい火焙の刑に逢つて死ぬその最後まで、佛蘭西軍人の立派な體面を保つてゐたであらうことを、僕はその時、心中で祈つてやまなかつた。

だが、いづれにしてもこの長靴のぶら下つた光景は、あんまり見てゐる氣持のいゝものでなかつた。考へて見れば、先刻は一時の怒りにまかせてあんなにひどく山賊の首領をやつつけてしまつたものゝ、もうすこし穩かに話をしてよかつたものをなどと少しは弱い料簡にもなつた。けれどいづれにしてももう遅い。コルクは抜かれた。あとはながの酒を飲みほすだけのことだ。それに、あのおとなしい少尉さまへこんな慘い殺しかたをされたのだ。

まして二番目の首領の腰骨を踏み折つたおれがどんなことしたつて助かるものか。さあ、どうせ死ぬときまつたら、ひとつ威勢よく死んでやらう。エティエンヌ・ヂエラールはこんな死にかたをしたと、後々の話の種に残るやうな立派な死にざまを見せて呉れよう、などと僕は心の中でおもひ定めた。けれどそれと同時に、たゞひとつ何に、知らず故郷の村で

自分の歸りを待つてゐる老つた母親のことや、またナボレオン大帝や、瑞隆兵士どもが自分の非業の最後を知つた時の嘆きなどを想ひやつて、さすがの僕も、今でこそ白狀するが月の光に顔をそむけてボロ／＼男泣きに泣いたよ。

だがさうしてゐる間にも、一方僕は何とかして逃げる手筈は無いものかと、如才なくあたりに眼をくばつてゐた。なんほ助かる見込が無いからと云つて、オメ／＼おとなしく馬醫者やぶち殺し棒を待つてゐる病氣の馬の眞似なんかしたくないからね。第一に僕はすこしでも手首の繩をゆるめようと、両手をいろ／＼折りまけたり、又は地面にこすりつけて見たりした。また足首の繩にもおなじやうなことをさま／＼に試みてみた。それからいよいよ逃げ出すときの手順も考へてみた。第一騎兵には馬が無けりや、まるで身體が半分無いやうなものだ。ところが倅にして僕の乗馬は二間と離れぬところまで靜かに草を喰つてゐる。それからもう一つ、最前自分らがやつて來た路は、險しい山路で、馬で行つてもごくソロ／＼しきや行けぬが、反對の方角へ行けば土地も平で、ゆるい傾斜の谿を下りて造作なく人里へ出られるらしい。一度あの谿



に足を踏んばり、手に帶劔さへ握ればもうこつちのものだ。  
一蹴りでこんな毒蟲連にはおさらばを定められるのだ。

僕はまだそんなことを繰返し考へて、手首や足首に力を入れてゐた。するとその時窟の口から首領のエル・クチロの姿がノコノコ立り現れた。かれは、やはり焚火のそばに呻きながら臥てゐた例の偽坊主の副首領の傍へ歩みより、二言三言何事が相談してゐたが、やがてうなづき合つて、二人して僕の方をふり返つた。それからエル・クチロは何か手下の山賊どもに言葉短かく命令すると、山賊どもは面白さうに拍手喝采して、そろつてまた僕の方をふり返つてデラ／＼笑ふのだつた。

僕はいよ／＼不安が身に迫つたのを感じた。が、それと同時に、かたく括られた手首の繩が、最前からの跳きでどうやら引きぬかうとすれば引きぬけるほど緩んで来たのを知つて嬉しく思つた。けれども手はよし自由になつてもこの足ではどうにも動きがとれさうにもなかつた。最前馬車の中の大立廻りでまたぞろ痛み直したと見え、顎の古傷は一寸立つても顔をしかめずには居られないほど疼むのであつた。



それで僕は、半分自由な、半分縛られたまゝの身體で、ちつと運命を待つよりほか仕方が無いことになつた。

### 八、恐ろしい死刑



へ行つたが、やがてエイ／＼懸聲をしながら一抱へもあらうと云ふ大石を運んで来た。それをドツシリ地面へ置くと、また一人の奴かど、こから太い麻繩を持つてきて、それをぐるぐる捲きに捲きつけた。

と、またほかの身の軽さうな一人が、その麻繩の片端を持つてあたりの樞の樹をしきりにあれかこれか迷ふ風で眺めてゐたが、中でもいちばん頑丈さうな奴に眼をつけて、それにスル／＼と攀つた。さうしてその梢のうまく二又に裂けたところへ繩をわたし繩のさを長く地面へ垂らした。

のこりの山賊連は駆け寄つてその繩のさをとつた。さうして、ちやうど井戸換へでもするやうに、揃つてエンヤエンヤ曳くと、繩のこちらの端に括りつけられてゐたさしもの大石は、スル／＼と次第に宙にのほつて、高く樞の梢へぶら下つた。これを見て山賊どもは自分等の手にあつた繩尻をもう一本の樞の樹の幹に固く括しつけてしまつた。さうして「さあこれで支度は出来た」と云ふやうな顔をして、ぐるり首領のエル・クチロのまはりをとりまいた。

一什一伍の様子を見て、僕には奴等のおそろしい企みの底



「デエラール中尉！」

エル・クチロはこの時僕のそばへ歩み寄つて、いかにも底意地のわるさうな笑ひかたをしながらかう言葉かけた。

「僕は多年戦場で鍛へたあなたの頭がどんなに固いか、拜見したいと思ふのです。で、今あなたにあの樅の樹の下に立つて頂きたい。そして僕はこちらに立つて、あの樹から樹へ張りわたした繩を切るのです。さうすると大石はズドンとあなた頭のてつと落ちてくる。ところで、いゝですか。もしあなた頭のてつと落ちてくれば大石ははね返されて地面に落ちるから何事も無いわけです。だが萬一あなたの頭よりも石の方が固かつたが最後、あなたはこれがこの世の眼をさめたと觀念しなぐらやなりません。」

エル・クチロはかう宣告してから、もう一べん愉快さうにゲラ／＼笑つた。それを見てそこに居並んだ四十人ほどの山賊どもも一度にどつと聲をそろへて笑つた。

諸君！ 僕はいまでも気分がすぐれない時、或はいくらか熱があつて臥床になど就いてゐる時、この當時の光景を夢に見るのだ。ぐるりと輪に並んでゐる野蠻な顔つきや、その残忍な眼ざしや、赤い火の光に反射された奴等の白い歯など



が、まるでもの深い地獄の輪のやうに眼に浮ぶのだ。なんにしても、自分はこの、世にも恐ろしい處刑をうけて命をとられることになつた。山賊どもは用捨なく僕の繩尻をとつて、例の大石のぶら下つてゐる樹の下へ引ずつて行く。そこで縛られたなり、僕は頭から煎餅のやうに潰されようと思ふのだ。

牽ばられて二足三足歩きかけたが、その時、僕は實に驚くべき現象を實驗した。それはよく人も云ふことだが、かう云ふせつば詰つた場合になると、人間の神経といふものがどれだけ微妙に動くものかと云ふことだ。僕は斷言する。人間が思ひもかけず急に命をとられようとする場合ほど、人間の生きかたが活潑になり鋭くなることは決して無いと云ふことを。その時僕にはあたりの樹木が流す幽かな暗の匂ひさへ嗅ぎつけることが出来た。地面に生えてゐる一々の草の芽さへ見わたることが出来た。また小枝々々のほんのわづかな葉揺れの音さへハッキリ聴くことが出来た。こんな微細なことは愈々命をとられる土壇場に立つた人で無ければ、到底見聞きすることの出来ないものだ。

ところでその鋭くなつた神経のおかげか、僕は今しがた山賊の首領が自分に死刑の宣告をしてゐる最中、どこか遠くの方がかすかな人聲のやうなものを聞いたやうな気がした。もちろんすつと遠方であるが、しかもだん／＼とこちらへ近づいてくるやうな気がしたのだつた。云ふまでもなくほかの山賊どもがそれに氣つきようが無い。

ところが、自分がいよいよ牽ばられて、處刑場の方へ歩き出した時、そのかすかな咬きのやうな物音は、だん／＼とはつきり僕の耳の中で形をなしてきた。まがひも無い、それは馬の蹄の音、手綱の鎖のジャラ／＼いふ音、それと帯剣が鐙にあたる音、それらが入り混つた物音だ。なにしろ口髭がポツリ唇のうへに開始めぬうちから軍馬に親しんでゐる自分だ。血迷へばとて、進んでくる軍隊の響を聞き違へようか？ 怒ら勇氣が僕の全身にみちわたつた。僕は出来るだけ大聲に叫んだ。

「オーイ、助けてくれ！ 仲間！」

山賊どもは何事が起きたかと驚いて、慌て、僕の口に掌を宛てがつた。さうして聲を立てさせずに急いで樹の下へ引摺つて行かうとした。

それにもひるまず、僕はなほさら大聲でどなりたてた。

「助けろ！ オーイ、早く来てくれ！ 助けろ！ 早く、早く！ 貴様らの上官が殺されかけてゐるぞ！」（の／＼）



たろさんの足袋たび

若山牧水

たびがやぶれた

たろさんの足袋たびが

かわいあんよの

たろさんの足袋たびが

よちよちあんよの

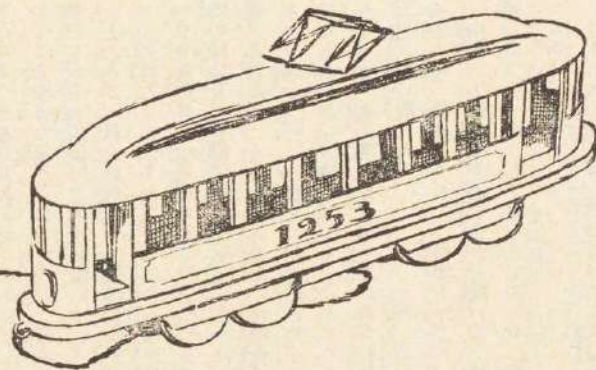
たろさんの足袋たびが

やぶれそもない

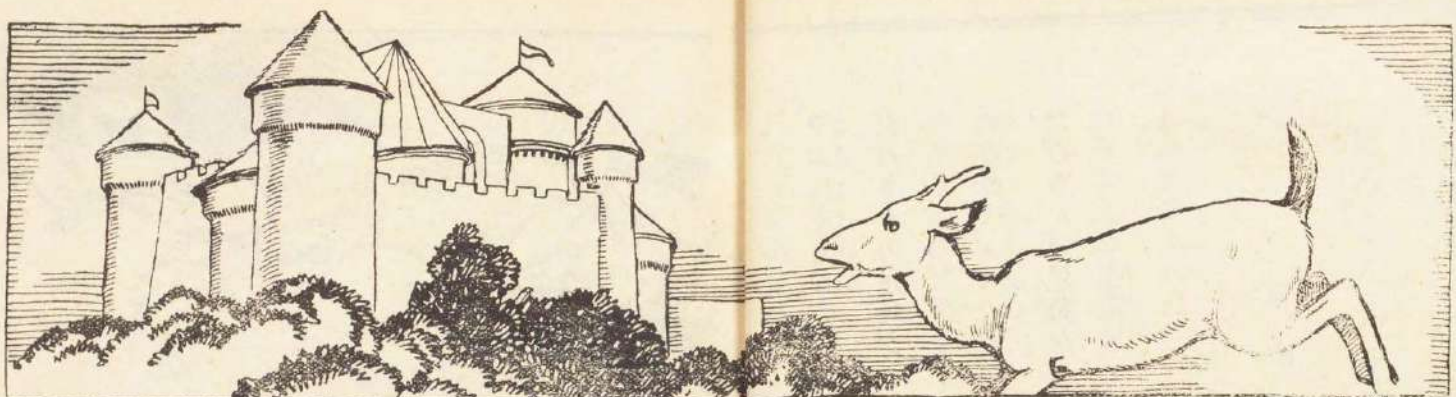
たろさんの足袋たびが

たびがやぶれた

たろさんの足袋たびが







# 狐の裁判

(つゞき)

小島政二郎

ペリンは遠い道をエツチヲオツチヲ大王の御殿までかへつて行きました。  
 「たゞ今かへりました。あの、ライネツケがこれを大王さまにさしあげてくれと申しました。中のものをつめます時、私も手づたひました」  
 かう云つてさし出された頭陀袋を一目見るが早い、大王は大よろこびで、いそいで口を開けさせてごらんになると、寶ものと思ひのほか、ランプの生首がころがり出したので、

「おのれ、このペリンめ。よくも朕をだましをつたな。誰かある。ペリンめを牢へぶち込め」とお命じになりました。

あんまりことが違ひすぎるので、ペリンが  
 「いえ、違ひます。私のし、ことではございません」と云ひ譯をしようとしても、

「え、だまれ。神妙にしろ」と、大勢の家來に引き立てられてしまひました。  
 そのあとで、ノベル大王は、はじめて狼のイセグリムやブラウンや猫のミニオンな

どが、罪もないのに牢屋にぶち込まれてゐたのを知つて、いそいで牢から出してやりました。三人とも、ライネツケのために生き皮をはがれて、オイ／＼泣いてゐました。大王は、氣の毒に思つて、三人を慰めるために、宴會を催しました。

一週間といふもの、森ぢうの歌があつまつて、飲めや歌への大きわざをして、青いやはらかい芝生の上では若いものたちがダンスを踊つて楽しんでゐました。すると、その最中に、

「助けて下さい、助けて下さい」と、けたましく叫びながら、血をあげた牝鹿が逃げ込んで來ました。

「どうしたのぢや、どつしたのぢや。喧嘩でもしたのか」と大王がおたづねになると、

「いえ、ライネツケが私の大事な二本の角を折つてしまつたのです」  
 かう云つて、くはしく説明しようとしてゐるところへ、またメルキノーといふお喋りな鳥が一羽とんで來て

「カア、カア、大王さまに申しあげます。ライネツケが道ばたで死んだふりをしてゐて、私の妻をそばまでオビキ寄せてとう／＼食ひ殺してしまひました。カア、カア、カタキを打つて下さい」

これを聞いたノベル大王は、もう堪忍の緒を切りました。  
 「よおし。もう朕も我慢が出来ぬ。ライネツケにひどい目にあはされた者どもよ。朕はお前方に約束する。今日から六日の間に、必ずライネツケの城を攻めて生けどりに





き一つする間にコロリとだまらかして見せるから。それよりもまあ、この千鳩の肉でも一しよに食べるがよい。まだホンの子供だから、舌がとろけるやうにやはらかいだらうと思ふんだ」と云つて、一向平氣なものでした。

「そんなもの、心配で喉を通りやアしません。大丈夫ですか、叔父さん、そんなに落ちつき拂つてゐて……私の考へちやア、向うから押しよせて来る前に、こつちからもう一度大王の前へ出向いて行つて、よくあやまつて置く方がいゝと思ひますがね」心配顔でグリーンバートがくどくどとかう云つたので、しまひに、ライネツケもその氣になつて、二人で山をおりて行きました。

だん／＼ノベル大王の御殿に近づくにつれて、流石のライネツケもこはくなつて来たのでせう、いろ／＼前に犯した罪の懺悔をしはじめました。その中にはこんなこともありました。或時、お腹がへつてお腹がへつてたまらなくなつたので、狼のイセグリムをさそつて、獲物をあさりに出ました。すると、向うから、牡馬が可愛い子馬をつれて、ポツカ／＼歩いて来ました。それを見たライネツケは、急にその子馬が食べなくなつたので

「牡馬さん／＼。その子馬はいくらですかね」とたづねました。すると、牡馬は

「これですか。これの値はね、私のあと足の跡に書いてあるから見て下さい」

「困つたな。私には字が讀めないんだが……イセグリム、君ちよつと讀んでくれな



して牢屋へぶち込んでやるぞ」

足を玉座の上に踏ん張つて、聲をあら／＼けてかう云つた大王の言葉を聞くと、皆のもの、さも嬉し／＼に聲を揃へて、

「うわア……」と云ひました。中でも、イセグリムやブラウンの喜びと云つたらありませんでした。それにひきかへて、例の穴熊のグリーンバートは

「さあ、大へんなことになつてしまつた。今度といふ今度は、ライネツケ叔父さんの命はほんたうにあぶないぞ。こりやア何をおいても、いそいで知らせに行かなければならない」さう思つて、大勢の中からこつそり抜け出して、スットン／＼大いそぎでメバタキス山へのほつて行きました。

行き着いて見ると、ライネツケは、暢氣さうに洞穴の前の日向に寝そべりながら、生まれて、はじめて巢を飛び出し、ばかりの子鳩を二匹つかまへたのを、うれしさうに眺めてゐました。

「叔父さん。大變です／＼。ノベル大王が、大軍を率ゐてライネツケ退治にやつて来ます」

グリーンバートが顔の色をかへて、今日御殿でおこつたことも詳しく話して聞かせても、

「さうかい、そりやアわざ／＼知らせに来てくれて有り難う。しかし、グリーンバート安心するがいゝ。なあに、いくらノベル大王がおこつたつて、俺の舌一つで、まばた





云はれるまゝに、なんの氣もつかずに、イセグリムが蹄を見ると、そのとたんに  
 牡馬はヒセイインといなきながら、ボーンと蹴かへしました。イセグリムは  
 キャツ」と云つたまゝ、しばらくの間そこへ氣絶をしてしまひました。

そのほかにも、まだ深山懺悔をしましたが、いち／＼書くに限りがありませんか  
 ら、このくらゐにしておきませう。さて、二人は、もう御殿へ間近になつた頃、お猿  
 マルチンに行きあひました。

「マルチンさん、どこへ行くね。そんなりをして旅でもするのかい」と、ライネッ  
 クがたづねると、

「うん、これから世界ちうのお寺まわりをして歩かうと思ふんだ」

「ホウ。そりやア丁度都合がい。私も巡禮がしたいと思つてゐるのだが、大王の御  
 殿へ行かなければならないので、とてもその暇がない。一つ私の分のおまりもして  
 来て下さいな」

「いゝとも。お安い御用だ。それはさうと、君は大層大王のお憎しみを受けてゐるさ  
 うだね。もしこれから御殿へ行つて困るやうなことが出来たら、私の家内が皇后付の  
 女中頭を勤めてゐるからネ、いつでも加勢をたのむがい。自分の女房の自慢をする  
 のも妙だが、なか／＼いゝ智慧をしほり出す女だから、きつといゝ助けになるだらう  
 と思ふよ。ぢやアさやうなら」 お猿もなか／＼いたづら者ですから、いたづら者同  
 志すぐと仲よしになつて、こんな話をして別れました。ライネツクも、さういふ加勢



が御殿にゐると思ふと、大へん心丈夫に思ひました。

ライネツクがまたやつて來たのを見て、ノベル大王をはじめ、イセグリム、ブラウ  
 ン、そのほかの獸たちも、みんな、そのづう／＼しいに呆れかへりました。

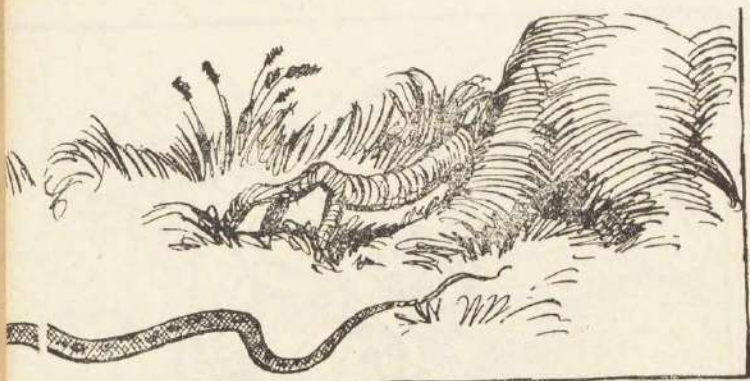
「大王さま、なぜわれ／＼の仲間には、かう意地のわるい奴が澤山ゐるのでございま  
 せう。また罪も科もない私を訴へたものがをりますさうで……」

例によつて、ライネツクは大王の前にヒレ伏して、馬鹿ツ丁寧な言葉つきで述べた  
 ました。

「ランプの生首を朕に送つたお前に罪がないと云ふのか。鹿の角を折つたり、鳥を噛  
 み殺したりしたお前に科はないと云ふのか」と、ノベル大王は、ブリ／＼しながら噛  
 みつくやうな聲でどなりつけました。

「お言葉ではございますが、ランプの生首を大王さまに送つたのは私ではございませ  
 ん。畜生、羊のベリンめ、あいつが途中でランプを殺して、頭陀袋の中に入れたのに  
 違ひありません。私はたしかにお約束どほり、あの頭陀袋には溢れるほど一ぱい寶も  
 のを入れておいたのです。鹿が角を折られたのは、今日私の家へ遊びに来て、私の三  
 人の子と仲よく御飯を一しよに食べてをりましたうちに、何かのことがら喧嘩をはじ  
 めました。もし私が助け出さなかつたら、鹿は三人の子のために噛み殺されてたか  
 も知れません。角の二本／＼折られても、私のおかけで命拾ひしたのを喜ばなけれ  
 ばならない筈です。それから、鳥が死んだのも、私のせむではありません。あの雌鳥





はふだんからいぢきたなしてしたが、今日もガツ／＼魚をたべてゐるうちに、喉に骨を立て、自分で死んだのです」

ライネツケは、ペラ／＼勝手放題な出まかせを喋りちらしましたが、ノベル大王はこれまでに懲りてゐますから、はじめから一言も信じませんでした。ライネツケが喋りたてればたてるほど、だん／＼不機嫌になつて行つて、しまひには我慢し切れずに「嘘もやみ／＼に云へ」と叱りつけたまゝ、ツイと玉座を立つて、皇后や多くの女官どもを従へて奥へはひつてしまひました。

流石のライネツケも、これには困つてしまひました。このまゝぐづ／＼してゐるものなら、きつと死刑の宣告をうけるに違ひないと思ふと、一刻もちつとしてはおられませんでした。で、大いそぎで、マルチン猿の女房を呼んでもらつて、

「ねえ、なんとかお詫びのかなふやうに、あなたから取りなして下さいな」と、頼み込みました。

「え、よござんす。そのかはり、何かおいしい御馳走か手にはひつた時には、私の方へもお裾分けして下さいよ」

こんな時にも、お猿は欲張ることを忘れないからをかしいぢやありませんか。このマルチン猿の女房は、皇后のお氣入りの女中頭なので、どこへでも勝手にはひつて行けるのをいゝことにして、この時も早速ノベル大王のお部屋の前をたゞきました。

「はひれ」と云はれてはひつて、すぐ喋り出したことをなんだと皆さんはお思ひです。か、自分の手柄話です。大王と皇后とに仕へてから何年になる、その間に自分はこれはれの手柄をしたと、とく／＼と自慢話をはじめました。これでいくらか大王の御機嫌がなほつた頃を見計らつて

「さて、大王さま。それほど手柄のある私でさへ叶はないのは、あのライネツケの智慧でございます。ホラ、一度こんなことがあつたではございませんか」

かう云つて話し出したのは、いつぞや或る百姓が山路をとほりかゝると、蛇が石の下敷になつてゐて

「お百姓さん。どうぞ私を助けて下さい」と頼みました。で、お百姓さんは可哀さうに思つて、重い石をウンス／＼どけて蛇を助けてやりました。すると、蛇はその恩を忘れて、急に百姓さんを吞まうとしました。お百姓さんは驚いて

「鳥さん／＼。どうぞ聞いて下さい」と云つて初めからの話をして、さて

「私は蛇に吞まれるのが正しいでせうか。蛇は私を吞まないので正しいでせうか」と聞きました。ところが、鳥はあとで分前をもらはうと思ふ心があるので

「そりやア君が蛇に吞まれるのが正しいさ」と云ひました。で、蛇は加勢を得たので「吞みに吞まうとすると、向うから狼と熊とが来ました」

「狼さん。熊さん。まあ、聞いて下さい」お百姓はあわて、二人を呼びとめて、同じやうに聞きましたが、二人の答へもやはり鳥と同じでした。で、お百姓は困りぬいて、とう／＼ノベル大王のところへ訴へて来ました。ところが、こんなことは一度もまだ





募集少年少女自作童話 (一等賞選)

### 蟹の仇討

長野市千歲町十二

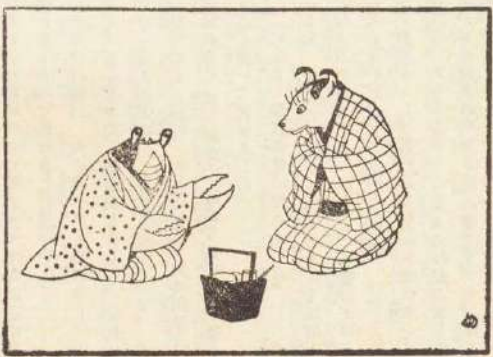
荒木 脩

昔犬と猫がそればかり仲がよく兄弟のやうにしてゐた時分の事です。

猫に親蟹を殺された子蟹は、どうかして親の仇の蟹を打ち取りたいものだと思ひましたが、よい考へが浮かびません。三日三晩寝ずに考へましたが、どうもこれといふ考へも起りません。子蟹はいろ／＼考へてゐると、丁度其處へ尋ねてきましたのが、同じ仲間の蟹でした。

「やあ、君、實に今度の事は……さぞ残念だらうね。君何とかしたまへな。時に君、エラク今日は、静いで居るね、どうかしたのかい。」と、親切に同情して尋ねてくれましたので、子蟹は喜んで、

「有難う。實は君、僕は親の仇の蟹を打ち取りたいと思つて考へてゐるが、どうも名案が



「さうさな、名案と言ふと、ないでもないが、浮ばないのだよ。君、何かよい方法を教へてくれ給へ。」と、子蟹が言ひますと、友達の蟹は、

「さうだ、これを叩いて猫さんを驚かしてやらう。」といふので踏家をたして、やつとの事で呼鈴を押しました。その呼鈴は奥へ通じてゐて、今丁度晝寝の最中であつた猫の耳へ通じてなりました。突然チリン、チリン、チリン、と鳴つたので、驚いて飛び上りました。

「だれだえ、今寝て居るのに。用があるなら明日来ておくれ。」と家の中からかういひますと二人は、

「猫さん、實は今日お願ひに來ましたが、明日では用がたりません。是非今日會つて下さい。」と言ひますと、猫は目をこすり／＼出て來ました。

「猫さん、實はこれ／＼かう言ふ譯ですが、

獸の間には起つたことがないので、大王もどう裁いたらいゝものか分らないで頭を痛めてゐると、そこへ丁度ライオネツケがやつて來て、

「なあに、それは譯はありやアしません。かうしたことゝ云ふものは、もとどほりにしてからでない判断がつけにくいものです。さあ、お百姓さんも蛇君も一しよに來たまへ」とさそつて、もとの山路へつれて行つて、もと／＼どほり蛇の上に大石をのせておいてから

「さあ、お百姓さん。この石をどけてやらうとやるまいと、どちらでもあなたの勝手です。よく／＼注意しなさいよ。——これが私の裁判です」

で、お百姓はよろこんで、勿論そのまゝ蛇の方を見向きもせずに、里へおりて行つてしまひました。——こゝまでマルチン狼の女房は話して來て

「大王さま、これが私本當の正しい裁判だと存じます。この森の國には、幾千人といふ獸がをりますが、誰一人としてかういふ智慧をしほり出すものはありません。せん。あの當時、大王さまも、ライオネツケのおかけで、朕も人間から笑はれずすむと仰やつて、大層お喜びになつたではございませんか。まだ覚えていらつしやるでせう。あの手柄一つだけでも、今度のライオネツケの罪ぐるるお許しになつてもいいと存じます。それを、云ひ譯も聞かずに罰するなんて、あんまり昔の手柄を忘れたやり方だと思ひます。まあ、云ひ譯なりと聞いておやり遊ばせよ」

マルチンの女房は、言葉上手に、ノベル大王を云ひ説いて行きました。(つづく)



どうかよい案が御座いましたら、かして下さい」と、言ふと、猫は直ぐ、

『それはお安い御用だが、俺にはよい考がない。幸ひ俺の親友の犬君の處へ行つて見給へ。俺も後から行くから。』と言つたかと思ふと、さつさと奥へ這入つてしまひました。

二人は仕方なく、今度は犬の處へやつてきました。そして犬に話をして味方になつてくれと言ひますと、

『よろしい、きつと僕が仇打の出来る様にしてやるから、心配し給ふな。安神したまへ』と、力づけてくれました。

『有難うございます。犬さんさへ助太刀して下さいばもう大丈夫です。』と言ひますと、犬は、

『なに俺ばかりではない、猫も助太刀してやらう。あれは俺の兄弟分だから。』と言つてゐる處へ猫がやつて来ました。そして兄弟分の犬の言ふ事ですから、直ぐ味方してくれると言つて、あらためて猫に向つて助太刀するとちかひました。子蟹は大喜びで、何度も何度もお禮を言つて歸つて行きました。

依氣のある犬は、この助太刀を大喜びで引

次の日に、猿は子蟹に一杯魚の骨や種々の物などを運ばせてまゐりました。そして、

『子蟹を殺したら、又澤山お禮を致します。』と言ひますと、何しろ喰心坊の猫は、お禮に目が眩んでとうとう承知しましたと、猿に約束してしまひました。

愈々仇討の當日になりました。あたりは大勢の衆が取巻いて、誰でも逃げられない様にしてしまひました。

やがて子蟹は、仕度をして出て来ました。すると同じやうに猿も仕度して出て来ました。子蟹は大層に、『やあ、猿、汝は我が親を殺したな。今その仇を討つてやる、覺悟しろ。』と呼びばると、猿は笑つて、

『お前等に殺されるやうな猿ではないぞ。貴様こそ殺してやる。』と言ひながら刀を振つて

『エイ。』と言つて切つてかかりました。子蟹は負けてはなりません。大きな鉄を振り上げながら猿に向つてまゐりましたが、何分猿の方が強いのでどうしても逃げません。段々切りつめられ、今にも切り殺されさうになりました。すると横合ひから、犬がヒラリと飛び出しました。

受けましたが、するい猫は少しも喜ばない其上に、

『僕等が助太刀してやるのに、魚の骨一本位持つてきてよいのに。犬君にはよいが、せめて僕だけに持つて来てよさうだ。』と怒の深い事を言つてなりました。

次の日子蟹は、犬の處へ来て相談をして、

『親を殺した猿奴。何月の何日、何時何分に、何處其處の原で尋常に勝負しろ。』子蟹も

これを見て猿は非常に驚きました。

『さあ、大變だ。キツト向ふの方にも三四人の助太刀があるかもしれない。子蟹などは恐れてゐないが、何しろ助太刀が恐しいからな。俺も思圖々々して居られない。』と猿は大いに慌て、あちらこちらと助太刀を頼みましたが、平生憎まれて居る猿の事ですから、誰も助太刀してくれません。

猿はもう困つてしまつて、道を歩きながら考へてなりました。すると向の方から猫がやつてきました。猿は、『さうだ猫君に頼まう。』

『やあ、猿奴。子蟹の助太刀にまゐつた。』と言ひながらこれ又切つて掛かりました。それを見て猿は非常に驚きました。

『おや、犬が助太刀か。これは適ばんぞ。』と思ふと、急に弱くなつてしまひました。

子蟹はこゝぞとばかり、はげしく切り込んでゆきますと、猿は何分犬が恐ろしいので、段々後へ下つてゆきます。

其の時、又猿の方から飛び出した者がありました。それは猫でした。猫はお禮の爲に猿に味方してしまつたのです。これを見ると犬は非常におこりました。

『やい、猫め、貴様はよく俺等を騙したな。卑怯者奴。』と言ひますと、猫はニヤ／＼笑ひながら、

『何が卑怯だ。何時お前達に味方すると言つた。何を言つて居るんだ、馬鹿奴。』と返答しました。

『よし、それなら俺が貴様を殺してやる。』と言ひながら今度は犬と猫の切り合ひになりました。

此方は猿と子蟹の方です。段々後へと下つてきた猿は、石に頭をバツタリ倒れました。

『ウマイ。』とばかり進み寄りました子蟹は、

と思ひながら急いで猿の傍へより、

『猫さん、今日は。貴君は何處へ行くのですか。』と尋ねますと、猫は先刻の事などクロロと忘れてしまひ、

『やあ猿君、今日は、僕がたゞア／＼してゐるばかりだよ。』

『さうですか。實は少し頼みたいのですが、聞いて下されば、少し位お禮いたしますが。』すると猫は、喰心坊ですから猿が少しばかり禮をするといふので、話を聞いて見ようと思ひました。

『なんだえ君、頼みといふのは、僕に出来る事ならね。』

『有難う。實はこれ／＼だが、何と助太刀してくれまいか。猫君、さうすれば明日君の處へお禮に行くが。』といひました。猫は何分お禮が欲しいので、

『あ、さうか、よし。助太刀してやらう。』

『さうですか。それはどうも有難う。ではお頼みます。』と言ひますと、猫は、

『よし、けれど明日持つてきてくれる物を忘れては困る、いゝかえ。』と言つて別れてしまひました。

と／＼親の仇の猿を討ち取つてしまひました。多くの衆等は、『萬歲、萬歲。』と言つて、子蟹の爲に喜んでくれました。

子蟹は仇を討つて向の方を見ますと、思入の犬と敵方の猫とが、組合ひ噛み合つたまゝはなれようとせず組合つてをります。

子蟹は驚いて急いで行つて犬を引起さうとしましたが、少しもはなすと言ふ事をしませんでした。其の中に思入たへん／＼になつたと思ふと、二人共組合つたのをはなしてしまひました。

もう起き上る勇氣もありません。そして今にも死にさうです。

やがて家から、犬の子猫の子が駆けつけて来ました。二人共自分の子に、

『どうか此の仇を討つてくれ。憎い、やつぱあ猫だ。どうか仇を討つてくれ。』と犬が自分の子にかう言つて死んでしまひますと、猫の方も矢張り様に子猫に言つて、死んでしまひました。さあそれからと言ふものは、今まで仲良かったのが、おたがひに仇同志となつてしまひました。

親代々言ひ傳へてなるので、何年立つても猫と犬の仲は決してなほりません。へをばり、



募集少年少女自作電話(二等賞選)

小雀のお禮

熊本市新屋敷町傘六番町

林田 三男

或ところに、それは、非常に貧しい村が  
ありました。しかし三年前までは、大層栄  
えていた村でした。それは三年前に呉六と  
いふ悪い男がその村に這入つて来て、村人の  
物をいろいろ奪つたり、こぼしたりしたから  
でした。

しかし、呉六に手向ふ者は一人もなく、誰  
も呉六をこぼがって、呉六のいふ事にはどん  
な事にも従つてゐました。

呉六の隣に作爺さんといつて、お米のよく  
出来る田を持つてゐるお爺さんがゐました。  
作爺さんばかり正直で、いつも呉六からい  
ろいろの物を奪られて、くやしくてくたまり  
ませんが、力が弱いので、どうする事も出  
来ませんでした。

或る暖い日本晴の日でした。お爺さんが畑  
と引よせ、向の山の麓の邊を指さして、恐し  
い聲でかう云ひました。

『あの真中のお前の田を俺にくれ。』

その真中の用といふのは、お爺さんが一番  
可愛がつてゐる田でした。

お爺さんは逃げようたつて、逃げられない  
し、やらないと言へば、ひどい目にあはされ  
るので、とうとうその田を呉六にやつてしま  
ひました。それで、それからお爺さんは、い  
つもお米が出来ずに、段々貧しくなつて來ま  
した。

或日の夕方、お爺さんが家の中でお米の種  
れる工夫を考へてゐると、窓の所で

『お爺さん、』と呼ぶ聲がしました。

お爺さんは、誰だらうと思つて行つて見る  
と、それは、この前助けてやつた小雀でした。  
小雀はお爺さんが出て來たのを見て、ささ木  
しやうに

『この前は有難うございました。今日來たの  
は、この頃あなたが呉六に田を奪られ、お米  
が出来ないさうですが、助けていた、いたお  
禮に、私がお田を呉六から取り返して上げ  
ようと思つて來たのです。』と云ひました。

で仕事をしてゐると、畑の隅の方で苦しま  
うな鳥の聲が微かに聞えて來ました。お爺さん  
は何だらうと思つて、行つて見ると、小さな



雀が苦しまうにもがいてゐました。

お爺さんは可愛想に思つて、雀を手の掌に  
のせてよく見ると、羽を痛めてゐます。お爺

するとお爺さんは、

『しかし、お前たちの方では、到底呉六には  
及ばない。』と、悲しうな顔をして言ひま  
した。

『イエ、私の仲間が深山あるから大丈夫で  
す。』と云つて、小雀は向の敷の中に見えなく  
なりました。

その晩中、お爺さんは雀が本當に田を奪り  
返してくれればよいがと、神様に願つてゐま  
した。

翌日は、大層天気がよかつたので、作爺さ  
んや深山のお百姓達には、昔、畑に行つて働き  
ました。

その日は、呉六も畑に來て何かしてゐま  
した。

お百姓達はお正午になつたので、皆持つて  
來た辨當を開いて食べてゐました。

と、その時、急に向の敷の中で『がやぐ』  
とやかましい鳥の聲がして、褐色の大きな雲  
の様な物が、こちらに向つて一生懸命に飛ん  
で來ました。

深山のお百姓達は驚いて、家の中に逃げ込  
んだり、畑の隅に少なくなつて、隠れてゐま

さんは『村の子供がしたんだらう。』と思つて  
仕事をすますと、雀を大切にいたはりながら  
懐に入れて家に歸りました。

歸るとすぐお爺さんは、懐から小雀を出し  
て、體を暖めてやりました。そして御飯を食  
べる時には、小雀にも食べさせました。

かうしてお爺さんは、優しく雀の養生をし  
てやつてゐる内に、そのかひがあつてかだん  
だん雀は元氣になつて、一週間もたつともう  
傷もすっかり癒ひ、大層元氣になりました。

それで、お爺さんは或日雀に、

『子供は悪いから注意おしよ。』といつて離  
から出してやりました。雀は『はい』と嬉し  
さうに、お爺さんに何度も『お禮を言つて、  
向へ飛んで行きました。』

お爺さんは元氣よく飛んで行く雀を見送り  
ながら、嬉しうに微笑んでゐた時、後から  
『おい』と大きい聲でお爺さんと呼んだ者が  
ありました。お爺さんは、それが呉六の聲で  
ある事をすぐに氣づいたので、逃げようとし  
ました。

すると呉六は『逃げたつてだめだぞ。』と、  
逃げようとするお爺さんの襟をつかんでやっ  
した。しかし、呉六だけば、

『何だ、そんなものが。』と云つて、やはり何か  
してゐました。

所が、その褐色の塊はだん／＼呉六の方に  
飛んで來ます。呉六は少し恐しくなつて、あ  
わてゝ逃げようとした。すると褐色の塊は  
とびつと四方に散つたかと思ふと、呉六を  
とりまいてしまひました。それは深山の雀が  
作爺さんに恩返しに來たのでした。

雀は呉六を取りまいて、呉六の日や口や鼻  
と言はず、どこでもちく／＼と囀つてつきま  
めました。呉六は狂人のやうになつて、助けを求  
めましたが、誰も助けてやりません。その中  
に、とう／＼盲目になり、聲になつてしまひ  
ました。

目が見えぬので、呉六は一生懸命に走り出  
しました。そして深い田圃の中に這入つて死  
んでしまひました。

作爺さんは、再び、呉六から奪られてゐた  
田を自分の物にする事が出来ました。

村人達も呉六が死んだので、大層喜びまし  
た。それから、此の村は元の様に平和になつ  
て、段々榮えて行きました。(なはり)





# 南京の夢

柳井正夫

支那の南京の、とある街を歩いてみますと、ふと私の目に映つたのは「不思議な少年魔術師」といふ意味を書いた支那文字の看板なのです。支那には魔術の上手な人が澤山にゐると云ふことを色んな人のお話や本で聞いてゐましたが、まだ一度もそんな魔術師に出會つたこともありませんでしたので私の好奇心は極度まで昂つてしまひました。で、私は早速その家の入口に立つて案内を乞ひました。

支那へお出になつた方は御存知の通り、一番最初の強い印象は、小さい女の子の耳たほに下げた寶石や金鎖と、さうして小さい一握り程の足です。かうした可愛らしい少女の一人

「申し遅れました、私は日本人で後藤と申します。」

と、私達は支那語で一通りの挨拶をすませて、向ひ合つて椅子に倚りました。少年の白子春は、まるで大人のやうな言葉を使ひなのです。

「何か魔術でも御覧になりたいとお出になりましたか？」

「さうです。私はまだ魔術といふものを見たことがありませんから、是非拜見したいと思つて参りました。」

「宜敷うございます。早速御覧に入れませう。が、あなたは日本からお金を儲けにいらしたのではありませんか？」

「さうです。私は日本の國にゐても少しも儲かりさうにありませんから、何か一儲けをしようと思つて、この南京の街へやつて来たのです。」

「では失禮ですが、こゝで魔術などを御覧になつてゐる暇に金儲けの口でもお探しになつたら如何です。」

私は少年の白子春に一本念所をやり込められましたので、ぐつと云ふことに行きつまりましたが、すぐそのあとでむつとした氣持ちになりました。

「そんな事は餘計なお世話です。たゞ私は今あなたから魔術

が、私を快よく室内に導いてくれました。

そこは極く遊味のある支那風の書齋めいた部屋でした。書や、山水の軸や、足の曲つた机や、そしてこの家にも定まつた様に置いてある青磁の香爐から、ゆるやかに香りのいい煙が細く上つてゐるばかりで、別にこれといつて魔術師の棲みさうな不思議な感じは致しません。

私は少女がすゝめてくれた曲木細工の椅子に、腰を降して今に主人公の少年魔術師が出て来るに違ひない、若しかしたら、あの香爐の煙の中からも異様な服装をして出て来はしないかと思つて、内心好奇心で一ばいにされながら待つてゐました。

やがて、コトリと音がしたかと思ふと、昔もなく正面の扉が開いて、そこからこれこそ魔術師らしいと思ふ少年がニコニコと微笑みながら出て来ました。案内普通の人間らしく出て来ましたので、私は少々當てが外れたやうな氣がしました。が、つと立つて少年に近づくと西洋風に握手をしました。

「よくお出で下さいました。私がこの家の主人白子春と申す者でございます。」





といふ珍らしいものを拜見したい爲にやつて来たので、お説教を聞きに来たのではありません。」

「仰せの通りです。が、私の申上けることにも間違ひはないでせうと思ひます。」

さういはれると、私は返す言葉がありません。黙つて下俯向きでしたが、何をこの青二歳がといふ氣がしてなりません。で、私はこんな莫迦らしい問答をしてゐるよりは、いつそ街へ出て儲け口でも見つけて早く大金持になつて、辱めを雪いでやりたいと考へましたので、

「では私は御免を蒙ります。あなたの魔術などは拜見しなくともようございます。」といつて、急いで部屋を出ようとしま

すと、  
「一寸お待ち下さい。折角お出で下さつたのですから、たゞ一つあなたに魔術をお授け致しませう。あなたの御商賣が繁昌しない、もしくは資本金が一銭も無くなつたといふ時が参りましたら、あなたの着ていらつしやる上着のボタンを一つもいで御覽なさい。それはきつとあなたの望むだけのお金にすることが出来ますから。そしてそのボタンの数は三つありますと、



その日から私は、毎日今日は東、明日は西と、南京の街を羅紗包みを擔いで賣り歩きました。が、何をいふにも始めての慣れない商賣だつたので、その年の暮れる時分には、すっかり失敗して羅紗店から預つて来た品物は、みんな何處かへなくしてしまひました。もう十二月の寒い日を、羅紗店へ歸る

すから、三度三度した事をする事が出来ます。たゞ申上けたいのはこの一事だけです。ではさようなら……。」

そして白子春は傍にあつた呼鈴の様なものをリン／＼と鳴らしました。すると前の女の子が出て来て、私を今入つたばかりの入口に送り出しました。

私は、ろくに挨拶もしなかつたほど心の中で怒つてゐました。そして絶えず口の中で「何を子供の癖に、大人に意見するなんて……。」とブツ／＼いひながら街を歩きました。

どうかして大きな儲けをして、福々いし大金持になりたい、この事が第一だ、そしてあの少年魔術師なんていふ小河童に鼻をあかせてやりたい、これが第二だ、といふやうなことを夢中で考へながら街をあてもなく、ぐる／＼と歩いてゐますと、ふと目についたのは或一軒の羅紗店の店先に「販賣員募集」と書いた紙の札でした。

で私は、先づ羅紗店の販賣員になつて金儲けの口を見出さうと思ひつきまして早速その店へ這入つて行きました。そして首尾よく雇はれることになつて、その店を出て来た時には私は羅紗の大きな包みを持つた販賣員だつたのです。

ことも出来ないで、どうしたら良いことかと思案しながら街をとほ／＼と歩いてゐました。私の頭へ急に湧いて来たのは魔術師の少年から云はれたボタンの事なのです。そんな莫迦なこと……と思ひながら、私は可成りの額になることを口の中で祈りながらボタンを一つもいで見ました。すると驚くではありませんか。そのボタンが思つた通りの金高になつたのです。で私は不思議に思ひながらも喜んで、早速羅紗店へ取つて返して品物の代を拂ひました。そしてその歳をどうやら過して新しい歳を迎へました。

翌年の春になつて、私は或知人の應援を頼んで、南京の街の目抜き場所に大きな日本料理店を開きました。が、これとても、やはり慣れない商賣だつたので、始めのうちの景氣にも似もやらず、終ひには驚ろくほどの借金をせねばならぬ破目に陥ちてしまひました。が、この時もボタンの事を思ひ出して、それをもぐことによつて、どうやら借金をしのぐことが出来ました。

失敗續きでやけくそになつた私は、こんなことなら遙々支那の南京三界までやつて来なければよかつた、いつそ東京に



るで、食ふだけの商賣をして安樂に暮してをれば……と思ひ返したのですが、今更それも追ひつきません。え、ま、よと、私はその歳一杯ぶら／＼して暮し、翌年の春になつて、今度は思ひきつて大きな仕事をしよう、よく人々のいふ相場と云ふものに手を出しました。これは日本のものに似てはるますもの、あれとは餘程やり方の違つたものなのです。私がその商賣を、もうこれきりと思ひ切つて始めました所が、どうでせう。私は、とん／＼拍子に、忽ちのうちに南京でも指折りの大金持になつてしまひました。私は内心得意でなりません。始めて成功者として鼻を高々とさせて、南京の街を興に乗つて大威張で歩きました。私は立派な邸宅に棲み澤山の召使を使ひ、そして美味い食物を食べ、毎日物見遊山と酒宴ばかりを續けてゐましたが、月に叢雲とかいひました、いつの頃からか、私は妙な病氣に悩まされねばなりませんでした。

それは全身どこいつて快い所はなく、頭痛、齒痛、咽喉炎、胃病、腹痛、リョーマチといふ風に、身體中を痛めてしまひました。そして毎日、頭か胸か腹か足などの専門のいい

醫者を呼んで療治しましたが、なか／＼治りません。それでも、その年の秋になつて、冷い風が吹く時分になつてから、私はやうやく以前の丈夫な身體に歸ることが出来ました。がかうしてゐる間に使つたお錢は、私が儲けたお錢では到底も足りさうにもありません。立派な屋敷も、買ひ集めた寶物もすべてを賣り拂つてもまだ足りない位なのです。

私は思案に餘つて考へてゐた時、フト思ひ出したのは、お金持になつてから着たことのない古ぼけた洋服のボタンの事でした。私は早速それを出して、ボタンを一つ、それらもう一つしかないのをもぎ取つて、出来るだけ澤山の額にししました。そしてそれですつかり支拂ひをしましたが、もうあとにはそんなに澤山は残つて居りません。つく／＼と私は悲觀に暮れてしまひました。そして、いつその事、生れ故郷の日本へ歸つて安樂に過さうと思ひつきましたので、早速南京から上海へ行きました。

そこから、長崎通ひの船に乗りましたが、もう懐中には一錢もありません。私はすつかり思案と悲觀のドン底に沈み込んでしまひました。失敗して故郷へ歸る、そのことはどんなに私の心に悲しかつたでせ。私は其悲しみに、ついふら／＼として船の上から女海難の眞只中へ飛込んでしまひました。ドブンといつてからあとは知りません。ほんやりとして夢の中をさまよつてゐるやうに感じられてゐるうちに、頼りに私の名を呼ぶ人があるのです。私はそれを現のやうに聞いてフト眼を覺まして見ますと、一人の少年が私の傍に立つて私の名を呼んでゐるのです。そして眼を開いて私を見て、にっこりと笑ふのです。ハツと氣がついて見ますと、それは、まぎれもない少年の魔術師です。

「どうです魔術は面白うございませうか？」

私はそれを聞いて赤面しました。

「では今のは魔術だつたのですか。私は夢を見てゐたのですね、三年も永い間の……」

私は一層赤面しました。そして、早々挨拶をすますと、その部屋を出て行きました。後から、少年魔術師の振る鈴の音がリン／＼と澄み渡つて聞えました。

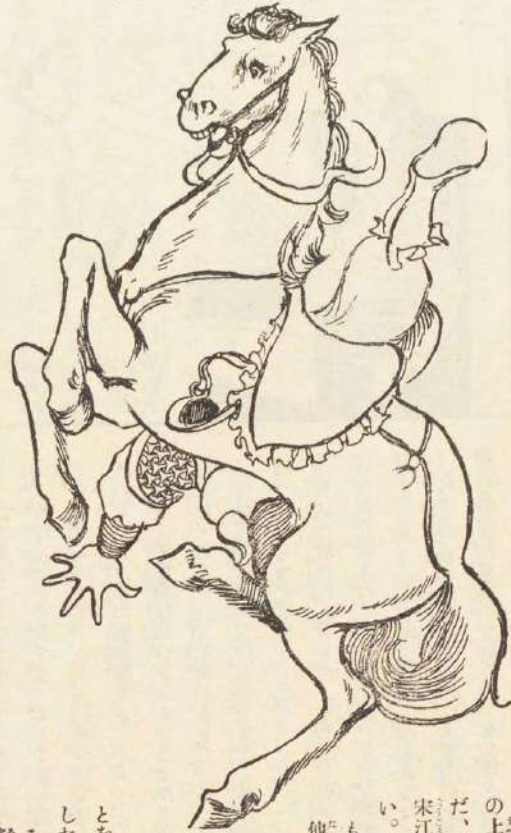
外には、秋の軟い陽が、靜に支那街の上を明く照してゐました。恰度私が此家へ遣入つて來た時と同じ様に……(をばり)





# 水滸傳

(第五回) 宮島資夫



の上に坐る事は、いやだ、梁山泊の總頭領は宋江でなければならぬ。と云つて受けつけ

もしませんでした。他、豪傑達も、宋江が第一位となる人だと云ふのですが、宋江はまた晁蓋の遺言を固く守つて皆の云ふことを肯き入れませんでした。

それでとうとう、宋江と盧俊義の二人、箆を引いて、東平府と、東昌府と二つの城に向ひ、どつちでも早く落した方が總大將となるといふ事に決りました。

それで二人は箆を引きましたが、宋江は東平府を引き當て、盧俊義は東昌府の方を引いて、二人は分れ、手に

眺め渡して見ますと、中軍の只中に、没羽箭張清が華かな鎧を来て、左に花頂虎、關旺を、右に中箭虎丁得孫を従へてゐました。その有様が如何にも勇ましく立派なもので、宋江は心の中でひそかに感心してゐました。

すると此時、張清をはじめ三騎の大將は陣の前に馬を馳せて来て、「梁山泊の草賊共、速に出て来て勝負を決しろ」と、罵りましたので、宋江は左右を顧みて、

「誰かあれと戦ふものはないか」と云ひますと、金鎗手徐寧といふ鎗の達人がすぐに馬を飛ばせて、張清を目がけて突きかけて行きました。

張清は少時相手になつてゐましたが、やがて急に馬を廻らして逃げ初めたので、徐寧はこゝぞと追かけて行きますと、張清はすぐと袋の中の石を取つて徐寧の眉間に當てました。悍勇無

## 石投げの名人張清

梁山泊の總大將であつた晁天王が死んでから後、山東の宋江と、河北の盧俊義との間に、第一座の位の譲り合が盛まりました。これは晁蓋が死ぬ時に、

下を従へて城攻めに出かけました。ところが、宋江の方は間もなく、東平府を陥れて澤山の兵糧を奪ひ、尚その上に風流雙鎗將董平といふえらい大將まで梁山泊の仲間に入り入れてしまひましたが、東昌府に向つた盧俊義の方は、はか／＼しく勝つ事も出来ず、時々は敵に苦められて弱つてゐました。

それはこの東昌府の大將に、張清といふ人がゐるからです。この人は神名を没羽箭といつて、石を投げる事が大變上手で一度狙ひをついたら百度打つて百度思ふ所に當るといふやうな名人でした。その手下にはまた花頂虎關旺と中箭虎丁得孫といふ二人の副將がゐりました。關旺は馬の上から鎗を投げる事が上手でしたし、丁得孫は馬上から劍を飛ばせて人を殺す事が巧みでした。

盧俊義との第一の戦ひの日にも張清

「私が死んでから後、誰でも仇の史文恭を打取つた人に、第一座の位を譲つてくれ」と遺言してあつたのですが、盧俊義はその史文恭を生擒つた人であつたからでした。

然し盧俊義は何と云はれても、宋江は郝思文と鎗を合せ、偽つて逃げながら石を投げて郝思文を馬から下に打落しました。

その時燕青が張清の馬を討たので、郝思文は助かりましたが、さうでもなければ、殺されしまふ所でした。その翌日は項充といふ大將が丁得孫の爲に飛劍で傷つけられてしまつたので、盧俊義は大變に心配して、宋江の所へ援軍を出してくれるように頼んで来ました。

そこで東平府を平けた宋江は、軍勢を率いてすでに東昌府に向ひ、盧俊義の軍と合して張清と戦ふことになりました。

それは丁度廣々とした平野で、兩軍の間をさへぎる山も川もなく、全く適當な野戦場だつたのです。

宋江は兵を率て、張清の軍に向つて行きますと、向ふからも隊伍を整へて進んで来ました。宋江は遙かに敵陣を



双と云はれた徐寧も、名人の擲けた石に打たれて、馬上に墮らすどつと落馬した所を、龔旺、丁得孫の二人が馳けよつて生擒しようとしたが、宋江の陣中からも呂方、郭盛の二人の大將が馳けつけて、漸く徐寧を助けて陣中に連れて來ました。

この光景を見てゐた宋江の陣中の者は、みんな驚き呆れて、黙つてゐました。

すると、  
「もう誰も出る者はないか」と宋江が云ひましたので、錦毛虎燕順といふ人が、鎗をひねつて馳け出しました。けれども此人は鎗でも張清に敵はないので、五六合戦つたと思ふと急いで逃げ出して來ました。

すると張清は後を追ひながら石を擲けましたが、それが燕順の甲の上の鏡に中つてかちんと大きな音かして響いたので、燕順は膽をつぶして鞍の上

は一人逃げ、二人來ては二人とも逃げて行く、せに、貴様も亦我が石の手並を見たいのか」と云ひました。宣贊は大いに怒つて、  
「汝の石はほかの人を打つ事は出来るとも、この宣贊にはよも當るまい」と罵り返した言葉が終るか終らない中に張清が擲た石は、宣贊が物を云つてゐる肥に強く命中しましたから、馬から眞さかさまになつて落ちました。この時も丁得孫と龔旺が馳けて來て生擒うとしましたが、宋江の陣から素早く飛んで行つて漸く宣贊を抱へて引取つて來ました。これを見てゐた宋江は憤然として怒つて、

「よし、もし自分が張清を捕える事が出来なければ、死すとも歸らない」と怒聲して自ら劍を抜いて陣前に馳け出さうとしたが、傍にゐた呼延灼は慌しく前に立ちふさがつて、  
「宋長兄、あなたがさう軽々しく手を

につ、伏して急いで陣中に逃げ込んで來てしまひました。  
すると又た一人  
「何だ、子供欺しの石ぐるる恐れることがあるものか」  
と云ひながら勢よく飛び出した豪傑がありました。

宋江は誰かと思つてこれを見ますと百勝將韓滔といふ人でしたが、鎗を揮つて張清と十數合戦つてゐます中に張清は馬をぐるりと一つ回したかと思ふと、もう石を取り出して擲けたので韓滔の鼻の上に當つたので、鼻血は泉のやうにきつと流れ出て、韓滔はさつきの大言にも似ず、這々の體でやつと陣中に逃げ込みました。すると彭紀といふ大將が、  
「え、生意氣な奴だ」  
といひながら、劍を舞して陣前に躍り出しましたが、まだ張清のそばまで行かない中に、龔旺に石を中てられて、

下される事はありません。私は不才未熟な者ですが、心をこめて戦つたら、彼を生擒にする事が出来るかも知れないから暫く待つてゐて下さい」といひ捨て、陣前に進み出ました。

そして、  
「張清、汝は曾て呼延灼が武名を聞いた事があるだらう。汝の飛石位はあへて恐れないからいざ戦へ」と、罵りました。

「何をいふか、朝廷に反いて賊軍に降つた恩知らずの呼延灼め。いざ我が石を受けて見ろ」と張清も叫びながら直ちに石を飛ばせました。呼延灼は鐵鞭の名人でしたから、鞭を振り上げてその石を拂はうとしましたが、拂ひそこねて左の臂を打たれたので、敵し難いと思つたのか急いで本陣に引きかへしました。

宋江明は益々焦立つて、  
「軍馬の大將は已に澤山打れたから、

刀を落して慌てて逃げ歸つて來てしまひました。

これを眺めてゐました兩軍の大將達を初め兵士達に到るまで、張清の勝れた手並にたゞ／＼感心して黙つてぢつと立つてゐるばかりでした。けれども宋江は大變に心配をして、  
「今日はまつ戦をやめて、明日もう一度戦はう」  
と云ひ出しましたが、それを聞くと盧俊義の後から、

「もし今日の戦に味方が勝たなければ、明日の戦にどうして勝つ事が出来るでせう。張清が打つ石は餘の人に當るとも、この私にはよも當るまい」と云ひながら飛び出した大將がありました。宋江は誰かと思つて振り返つて見ますと、それは醜郡馬宣贊でありました。宣贊は勇しく刀を舞しながら進み出ます。張清は聲を張り上げて、  
「梁山泊の意氣地なし共が、一人來て今度は歩軍の大將達出て戦へ」と命令しました。この聲を聞くと直ちに陣前に跳り出したのは、赤髮鬼劉唐でした。張清は劉唐を見てあざ笑つて、  
「馬上の者すら自分の石には敵し難いのに、歩軍の者がどうして敵する事が出来るものか」  
と云ひました。劉唐はこれを聞いて益々怒り、たゞ一打と刀を揮つて斬りかかりました。張清は敵しかねたのか鎗をたふして逃げかへらうとしましたが、劉唐は元來劍法の達人でしたから追打ちさまに張清が馬の腰に切りつけたので、馬は壁のやうに眞直に立ちながら、さつと尾を振つたその先が、劉唐の眼を拂つた爲に、兩眼の眩んだ所へ張清は石を投げて地上に倒し、たうとう劉唐を生擒にしてしまひました。

宋江は大變に心配して、  
「誰か早く劉唐を救ひ給へ」と云ひますと、青面獸楊志が刀を揮つて張清に





切つてかゝり、しばらく戦つてゐましたが、張清はまた石を飛ばして揚志の甲にあてたので、揚志は驚いて逃げ出してしまひました。

先刻からあれほどの勇士が出る度に張清一人の石の爲に皆な傷けられてしまふのを見て、宋江は心の中に堪えきれないやうな憂ひを抱きました。  
「今日の一戦に勝を得なければ、張清の爲に氣を吞れてしまつて、明日戦ふ時も勝を得ることが出来るかどうか判らない。誰かよく張清を生擒つて、味方に勢を添へるものはないだらうか」と宋江が思はずつぶやきますと、朱令といふ強い豪傑が雷横といふ豪傑と眼くばせしてから云ひますのは、「張清は全く石の名人だ。一人でもつて向つたらどうしても敵ふまいから、右と左から二人で挟み打つたら、勝を得られない事もあるまい」と云つて、二人は鞭を並べて陣前に

進み出ました。

すると張清はこれを見て、「やあ梁山泊の小盗人共が、一人々々では敵はないのを知つて、とうとう二人で向つて来たな。貴様たちが何人來るとも恐れる張清と思つてゐるか」と石を握つて待つてゐる所へ、雷横が刀を揮つて切り込んで來ましたが、たゞ一打に馬から落されてしまひました。

今までこれをぢつと眺めてゐた大刀關勝と云ふ豪傑は、この時齒を咬みしめて口惜しがり、青龍刀を揮つて朱令と雷横を助けに來ました。張清は直ちに石を擲けましたが、關勝が素早く青龍刀で拂つたので、石は及金に當つてからんと凄じい響をして、電光のやうな火花を散らし。關勝はこの暇に二人を助けて陣中に退きました。張清の石を避けたのは、此日この人が初めてでした。

この時、双鎗將軍董平は、東平府に

宋江の軍門に降つてから、まだ何の功も立てずにゐましたが、先刻からの有様を見て、

「私は梁山泊へ入つてからまだ何の勳功も現はした事がない。今日こゝで勳を建てなければ皆の者から恥しめられるやうになるだらう」と心の中でひそかに考へて、双つの鎗を提げて陣前に出て來ました。すると張清は、

「やあ董平、汝と我とは隣國の好みで常に仲よくしてゐたのに、どうして朝廷に背いて敵に降つたのだ。その上この張清に及んで來るとは木か竹よりも劣つた奴だ」と罵りましたので、董平は怒つて、鎗を揮つて突きかゝりました。

少時戦つてゐる中に、張清はまたはつしと石を飛ばせましたが、董平は巧みにこれをかはして、  
「貴様の擲ける石は、ほかの人に當るともこの董平に當るものか」とあざ笑

ひながら、尙も鎗を揮つてつきかけて行つたので、張清は馬を回らして逃げながら、第二の石をまた投げましたが今度も董平は綺麗に鎗で拂ひ落してしまひました。張清は二つの石が當らないので、心の中に驚いて、慌て、馬を飛ばせて陣中に逃げ込まうとした所を董平が追ひかけて來たもので、二人は少時そこで戦つてゐました。

すると宋江の陣から索退といふ人が斧を携へて馳け出してくると、張清の陣からも丁得孫、龔旺の二人が出てくる。宋江の陣からは更に林冲、花榮、呂方、郭盛の四人の大將が出て來たので、張清は馬をかへして逃げてしまひました。董平は少時これを追ひかけましたが、張清がまた石を飛ばせたので長追ひせずには本陣に歸りました。この間に、林冲と花榮は龔旺と戦ひ、呂方と郭盛は丁得孫と戦つて少時勝負がつかずにゐましたが、龔旺は投げ鎗を使



ひつづくして遂に林冲花榮の爲に生擒られてしまひ、丁得孫は劍を投けても中るまいと思つて鎗を取つて死を決して戦つてゐました。

するとこの光景を眺めてゐた浪子燕青は、

「張清のために石に打たれた人達はもう十四五人になるが、かういふ時に自分の弓の腕前を見せてやらなければならぬのだらう」と考へながら、弓に矢をつがへてひようと放つたのが、丁得孫の乗つた馬の足に中つたものですか、馬は逆立ちとなり、丁得孫は振り落されてしまつた所を、呂方と郭盛が捉へてしまひました。張清はこれを救はうと思ひましたが、先刻からの戦ひでもう疲れてゐるものですから、生擒にしてあつた劉唐を引き連れて、城中に引き返して行きました。

宋江も人馬を収めて一旦陣中に引き返して行きますと、まづ董旺と丁得孫

とを、梁山泊に送らせてから諸豪傑を集め、

「昔大梁の王彦章は、一日の中に唐の大將を三十六人討ち取つたといふことだが、今我々は張清のために大將十五人を傷けられた。我軍の諸將も武藝に於て決して張清の下にあるわけではないが、張清も亦一人の猛將だ」といつて嘆息したので、これを聞いてゐた諸豪傑は唯々黙つて首垂れてゐるばかりでした。

宋江はまた言葉をついで、「然し私が張清の様子を見てゐたのに、董旺と丁得孫を翼のやうにして戦つてゐたから、あれほど勢ひが強かつたのだが、あの二人が生擒られてしまつたからは必ず勢ひが衰へるに違ひないと思ふ。この際彼を生擒るやうな好い計はないだらうか」と云ひますと、軍師の呉用が進み出て、

「宋長兄、もうそんなに心配な

そこで張清は、  
「それなら今夜打つて出て、陸の上の車を奪ひ、あとから水中の船を奪ひ取つてやらう。兵糧さへ續けば、いつまでも籠城することも出来るから」と城の太守にその事を話して、その晩張清は千人餘の軍勢を引き連れて、靜かに城を出て行きました。

やがて二三里ばかり行くと、向ふの方から澤山の車が續々と来る様子でした。張清は月の光で眞先に立てた旗印を眺めると、そこには「水滸塞の糧食」と黒々と大きく書いてありました。そして花和尚魯智深が、六十二斤の重さのある鐵禅杖をすしんくつき立て、悠々と眞先に進んで来るのです。

張清は、  
「よし、あの大きな坊主頭に、俺の石をこつんと一つ御見舞したら、一寸面白いに違ひない」と思ふと、石を手にして待つてゐました。

魯智深は、向ふの方に敵が隠れてゐることを己に悟つてゐましたが、わざと知らない風をして近くに進んで来た所を、待ち設けてゐた張清は狙ひを定めて、うんと手頃の石を投げましたので、魯智深の頭にかつんと當ると血は水のやうに流れ出て、流石の勇氣のある花和尚も、眼を廻して倒れてしまひました。

それと同時に張清の軍勢は、どーと斬り出して行きましたから、魯智深の命も己に危くなりましたが、武行者武松が兩刀を揮つて切り込んで来て、魯智深を助けると車を捨て、這々の態で逃げ出して行つてしまひました。張清はすぐに兵士に命じてその車を奪はせて中を改めて見ると、まがひもない本當の糧食でしたから、大變に喜んで車を押させて城中に歸つて行きました。張清は一旦城に歸つて太守にこの事を話しましてから、

とはありません。私は今日張清の動靜を委しく觀察してもう己に計を決めました。今はまづ取り敢へず俺我をした豪傑達を梁山泊に歸して、代りの大將達を呼ぶのが第一です」と云ひました。そこで十五人の大將を山の陣に歸して、魯智深、武行者などといふ大將を呼びよせました。

一方の張清の方でも、その翌日から城門を固く守り斥候を出して、梁山泊の方の様子を毎日窺つてゐました。すると、ある日、探察の者が歸つて来て「今日梁山泊の陣の方へ、陸の上を百輛ばかりの車に兵糧を載せ、河にも五百餘艘の船に兵糧を積んで進んで來ました」と報告しました。然しまだどうも本當の事が解らないので、安心の出來る家來を出して探らせましたと、それは本當に兵糧なので、無理に隠さうと思つて幕を張つてあつたが、その下から米の袋が見えてゐると知せました

「時が遅れて敵が用心するといけませんから、これからすぐに舟の糧食も奪つて來ます。」

と云つて、再び人馬を引き連れて河の邊りへやつて來ますと、今まで空は晴れて月は皎々と輝いてゐたのに、俄かに眞黒な雲が天を蔽ひ、濃い霧が四邊を一面に閉してしまつて、味方の者の顔を見ることが出来ないやうになつてしまひました。これは宋江の方の陣中で公孫勝が術を使つて、かういふ風にしてしまつたのです。

張清は急に變つたこの天氣を見て心の中で驚いて、急いで軍を引返させようとしてゐますと、親子頭林冲が、人馬を率いて馳けて來まして、張清の軍勢を人馬諸共河中に追ひ落しました。すると河の中には、李俊、張横、張須などといふ水軍の大將が鎗を揃へて待つてゐましたから、陸の上ではあれ程に梁山泊の豪傑を惱ました張清も、地



愛なく捕へられてしまひました。宋江はこれを聞くと、時こそ好かれと三軍に命令して、東昌府の城を圍んで喊の聲を上げて攻め立てさせました。城の太守は頼みにしてゐた張清は生擒られ兵卒は多く打たれた上、不意打に押し寄せて來られたので、慌て、裏門から逃げようとしましたが、そこにも宋江の軍勢が押し寄せて來てゐたので、手向ひ一つする事も出來ず、おめくんと虜になつてしまひました。

宋江の軍は城に入ると、すぐと生擒られてゐた劉唐をまづ救ひ出し、次に東昌府の庫を開いて金銀米穀の類を取り出して、これを二つに分けて一つはその國の人民に分け與へ、一つは梁山泊に運んで軍用に供へておく事にしました。これは梁山泊の人達が何時でも城を奪つた時に行ふ規定でした。それから東昌府の太守は平素からよく民を憐んでゐたと云ふので、大切にして再

び城を守らせることにしました。

さて一同が梁山泊に歸りますと、水軍の大將達が、張清を引き連れて、宋江の前に差出しました。

宋江は急いで張清の繩を釋いて大切にいたはり、梁山泊の人達は、たびく天に代つて道を行ふ事を考へてゐる丈で、今の朝廷には奸佞邪智の悪い人がゐて、人民を苦しめるからかうしてこゝに立て籠つて悪い役人達を懲して大義を行つてゐるのだと云ふ事を話しました。そして張清にも梁山泊へ入るよう勧めました。

するとその時、花和尚魯智深は、怪我をした坊主頭を布で包んで虎のやうにたけりながら、禪杖を振り上げて馳けて來て、張清をたゞ一打に殺さうとしました。魯智深の後には、まだ十五人の大將達が張清に傷けられたのを口惜しがつて、齒齧みしてつきそつてゐま

した。

宋江はそれを見ると急いで押し留めて、言葉を盡して魯智深初め、十四人の大將をなだめたので、皆なは漸く、もう張清に決して害を與へないと誓ひました。

張清はこの宋江のなさけの心の深い扱ひを心から尊敬して、地上にひれ伏して降参すると云ひました。

そこで宋江は、すぐと盃を取つて天地の神を祭り、箭を折つて誓を立て、

「今後誰でも張將軍を恨む事のあるものは、天神の罰を蒙つてすぐに及の下に死ぬであらう」と大きな聲で叫びました。

多勢の豪傑達もこれを聞いて異議を唱へる者は更にありませんでした。これから張清も梁山泊の頭領となつて、方々の戦ひに石を投げて勳功を立てました。(をばり)



# 謀叛人の子

霜田史光

十兵衛が十の時でした。お父さんの光秀は信長の命令で、或國の大將と戦ふことになりました。お父さんは十兵衛を招んで、

「十兵衛、お父さんはこれから隣の國まで戦ふをしに行つてくるから、留守の間は從順しくしてよく學問を勉強して待つてゐなければなりませんよ。その代りお父さんが戦さに勝つて歸れば、お前の飛び上つて喜ぶやうなお土産を持つて來てあげますよ。」と申しました。

十兵衛は今迄幾度もお父さんが戦ふに行くのを見てゐまし

明智光秀と云へば皆さんも御存じの通り、御主人の右大臣織田信長に叛いてこれを殺し、僅か三日の間、天下を奪つただけで、すぐに秀吉の爲めに亡ほされてしまつた人ですが、この悪者の子に十兵衛光慶と云ふのがありました。十兵衛は幼い時から大層智慧があつて、お父さんの光秀や、家來達を驚かした事は幾度となくありました。たし、それに一度も負けて歸つたこともないので、少しも心配はしないのですが、今度は何となく、戦さと云ふものが見たくてなりませんでした。

「お父さん、お願ひですから私を戦さに連れて行つて下さい。」と云つたのであります。これを聞いてお父さんは思はず眼を大きくして驚きました。「何を云ふのです。お前はまた十ではありませんか、一緒に行くことはなりません。」と云つて許してくれませんでした。然し、十兵衛は幾度も熱心にお願ひしましたので、十



兵衛を大層可愛がつてゐるお父さんの光秀は、たうとう気が折れてしまひ、

「それでは陣屋の外へは決して出てはなりませんよ。」と固く云ひ含めて連れて行くことになりました。そして家來の中で強い侍を一人選んで十兵衛の附添にしたのであります。

やがて、澤山の兵隊を率ゐるお父さんは、隣りの國境に向ひました。そして國境の山に掛つた時、日が暮れましたので、谷川を前にした澤に野宿をすることになりました。

十兵衛は生れて始めて野宿と云ふことをするので嬉しくてなりません。いつも立派なお部屋の中に、立派な蒲團に包まれて寝るのに、今夜は枯葉を敷いて布子一つに包ま



て、月夜の空を跳めながら寝ることは、妙に楽しかつたのであります。

六〇

お父さんの光秀を始め澤山の兵隊は、晝間の疲れてむきに眠つてしまひました。たゞ見張りの幾人かの侍だけが、どん／＼と篝火を焚いてゐるだけでした。

十兵衛は眼が冴えて眠られませんでしたので、美しい月夜の空を仰いでゐますと、その時何やら夜の鳥がキヤア、キヤア、と啼きながら後の山から前の谷川を越えて向の山へ飛んでゆきます。それが三四十羽續きましたので、十兵衛は大層

怪しみました。

そして、急いでお父さんを揺り起しました。

「お父さん、起きて下さい、大變です！」

「何事だ！」

戦さに慣れてゐるお父さんはすぐに起き上つて、周囲を見廻しながら申しました。

「今私が見てゐますと、澤山の鳥が怪しい啼聲をして向ふの山へ飛んで行きました。これは屹度、後の山に敵の兵隊が忍んでゐるに違ひありません。今のうちに御用意をなさらないと、變殺しにされてしまひます。」と十兵衛は云ひました。お父さんは笑顔をして、

「は、ア、十兵衛心配することはありませんよ。お前は始めて戦さに出て來たので、びく／＼してゐるから何んでも敵に見えるのだ。」と云つてまたごろりと横にならうとしました。「いゝえ、お父さん、そんなことはありません。昔、源義家は草叢から雁の飛び立つのを見て敵の兵隊の隠れてゐたことを知つたと云ふことをお父さんはよく話して聞かして下さつたではありませんか。今夜の鳥が澤山一時に飛び立つて行くのは、屹度義家の時のやうに敵の兵隊が後の山に隠れてゐるに相違ありません。」

お父さんはこれを聞いて、すつくと起き上りました。「成程、お前の云ふことはまるで根のないことではない。そ

れでは早速あの山に斥候の者をやつて見よう。」と云つて、四五人の家來を起して見に行きました。

暫らくすると、斥候の人達は歸つて來ました。「大將殿、大變でございます。後の山の中腹に敵らしい澤山の兵隊が隠れてゐます。何んでも夜の明けるのを待つて、味方に掛らうとしてゐるらしく思はれます。」

これを聞いて光秀は吃驚してしまひました。そしてそれを早く覺つた十兵衛の偉いにも、また吃驚してしまひました。光秀は忽ち兵隊を一人残らず起して、その夜のうちにそつと谷川を涉つて、向ふの山へ這入つてしまひました。そして今度はあべこべに、向の山の中腹に隠れてしまつたのであります。

さうして夜が明けた時、敵の兵隊はどんなにまごついたこととせう。まご／＼してゐる間に、味方の兵隊は一時に山から出て來て、夜のうちに伐り倒して置いた澤山の木を谷川に懸け渡して橋にしてそれを渡つて、たうとう敵をひどい日に遭せて負かしてしまひました。

其の事があつてからお父さんの光秀は、十兵衛をますます



可愛がりました。又誰一人、その偉いことを認めない者はなかつたので、末はどんなに偉い大將になるだらうかと、それが思はれてお父さんは嬉しくてならなかつたのです。

お父さんの光秀が、信長に謀叛を起したのは十兵衛が十四の時でした。十兵衛はまだ年若ではありましたが、もう大將となる貫目は充分ついでりました。學問も武藝も人並優れてよく出来ました。

そして、十兵衛は心が眞直で少しでも曲つたことは大嫌ひでした。ですからその心はまるで秋の空のやうに澄んで、その人を見ただけでも氣高い感じがいたしました。

そのやうな心の正しい十兵衛ですから、お父さんの光秀はいよく御主人の信長に叛かうと決心した時も、我子ながら何となく、恐れてそれを知らせませんでした。

或夜、光秀は一番大切に思つてゐる家來の左馬之介光俊を自分の寢所に招んで、

「大事な相談があるから蚊帳の中へ這入つてくれ。」と申しました。



左馬之介は夜更けに蚊帳の中へ呼び入れる位ですから、よほど大事な相談に違ひないと思ひましたので、蚊帳をまくつて中に這入ると、聲を秘めて云ひました。

「一體どんな御相談のですか。」

「私はお前の首が欲しいのだ。」

左馬之介はびつくりしましたが、

「私一人の首ですか。」とまた聲を秘めて云ひました。

「いや、もう三人の首を貰ふことにしたが、まだ足りないのですね。」と光秀は靜かに云ひました。

「それでは是非もないことです。私も命を差上げますから、少しも早く事をお舉げなさい。」

これを聞いて、今度は光秀の方が吃驚してしまひました。

「お前は私の謀叛の心を知つてゐたのか。」

「いゝえ、知つてゐたと云ふ譯ではありませんが、日常あなたが御主人に憎まれてゐることや、御不満のことから考へてかう云ふことになりはしないかと思つてゐたのです。」

「さうだつたか、私は始めてお前に相談すると、屹度止められると思つてまづ老臣三人に話したのだ。その承知を受け

たからいまお前に話すのだが、若しお前が聞き入れなければ暫つてしまはうと思つてゐた位だ。」

「私も始めて私にお話しなされるなら、必ずお止めたでせう。然し老臣三人にお話しになつたとすれば、最早お止めするの無益だと思ひました。」

「それにしても十兵衛にはまだ知らせないけれど、あれに話したらきつと止めるだらう。」

「さうです。あの曲つたことのお嫌ひな十兵衛殿は、命に更へてもお諫めするでせう。ですから十兵衛殿には内密で、首尾よく行つた後でお知らせになるがよいと思ひます。」

「うむ、私もさう考へてゐる。」

かうして謀叛の相談がすつかり決つてしまひました。その頃十兵衛は病氣で丹波の龜山にゐましたが、いよく謀叛の戦さしようとする前の日に、お父さんの光秀は十兵衛の病氣を見舞ひに行きました。

「十兵衛、今日は心持はどうだね。少しは病氣はよいか。自分は今から備中に戦ひにゆくから、お前はよく養生をして私の歸つて来るまでにはすつかり丈夫になつて下さい。」



いつも我子に優しい光秀は、親らしい情をこめて云ひました。  
「はい、有難うございます。追々病氣も直しいやうでございますから、お父さんには私の御心配なく戦さに行つて下さいまし。」



「まづ京都へ入つてから備中に行く。」と兵隊には云ひ聞かせて、保津宿から山中尾を通つて衣笠山の裾に出ました。すると兵隊の誰彼が、あまり道が遠ふので、少々怪しみ出しました。

十兵衛は床の中に起き上つて申しました。

「今度の戦ひが済んだら、屹度お前によい報せをするからそれを樂みにして待つてゐるがよい。」と云ひ残して、お父さんの光秀は歸りました。そして、一族である隠岐守を附人として残して置いたのでした。

光秀は信長の命令け通りに備中に戦さに行くと云つて二萬の兵隊を率ゐて出かけました。

ました。

信長はその時本能寺にゐたのですから、二萬の兵隊はそれを聞いて、自分達の大将が謀叛を起したことを知りました。そして一時に吃驚してしまひました。すると左馬之介を始め三人の老臣が、眞先に刀を高く差し上げて従ふ心を示したので、今は仕方なく首の兵隊が刀や弓や槍を一齊に高く差上げました。

その夜光秀は、本能寺に討ち入つて御主人の信長を殺してしまつたのです。

翌日、光秀は急ぎの使を立て、龜山にゐる十兵衛に知らせました。

附人になつてゐた隠岐守は、主人の成功したことを知つて大いに喜び、十兵衛の床に就いてゐる所に慌しく這入つて來て云ひました。

「十兵衛殿、お喜び下さいまし。あなたのお父さんは將軍になられましたぞ。」

十兵衛はそれを聞いて、吃驚して起き上りました。

「何、お父さんが將軍になられたと。そんな筈はありません。

「大将殿、我々は何處へ行くのでございますか。」と、訊ねました。

光秀はもう隠す時ではないと思ひましたので、大聲に、「自分の敵は備中ではない。本能寺にゐるのだ。自分に従ふものは獲物を高く差し上げよ、厭な者は歸るがよい。」と云つて歸らうとする者があれば、斬つてしまひさうな素振を見せ

織田右大臣殿のおいでになる以上は、どうしてそんなことがありませう。」

と、云ひました。

「いゝえ、右大臣殿は昨夜じくなられたのでございます。」  
十兵衛は、さてはお父さんには大恩ある御主人に刃を向けて殺し奉つたのであるかと思ひました。

「あ、お父さんは、お父さんは、何んと云ふ情けないことをなされたのでせう。」と云つて、十兵衛ははらりと涙を流しました。

「あれだけの家來も居り、左馬之介殿も居りながら、誰も止め立てするものはなかつたのか。お、情ない、お父さんは逆賊……あ、私は逆賊の子……」

と云つたと思ふと、十兵衛の胸は張り裂けるやうに一杯になつて、體中の血はほろりと頭にのほつてくるやうな氣がして、その儘氣が遠くなつて床の上にはつたりと倒れてしまひました。

隠岐守は驚いて介抱しましたが、十兵衛の體は冷たくなつて、もう生き返りませんでした。(をばり)





# 若き巨男

## 馬場孤蝶

それから又少し行きますと、一つ畑がありました。若者は土地支配人に逢ひまして、雇人の宰領はいらぬかと、きましました。

「うん、それはいるよ。お前はよかりさうな男だから、使つてやつてもいゝんだが、給金は年に幾ら欲しいといふのかね？」と、土地支配人がききました。

若者は、給金は一文もいらぬのだが、唯一年の終になれば、主人をひどく三つなぐるといふ権利を與へて貰ひたい、唯それだけを固く約束して貰へばそれでいゝのだと答へたのですが、その土地支配人は怒張りでしたから、わけなく承知しました。

次の朝は、雇人どもは朝早く起きて森へ材木を取りに行くことになつてゐました。けれども、新顔の若者は寢込んだままで、なかく起きて来ません。雇人のうちの一人が、かう云つて、聲をかけました。

「もう起きなきやアいけないよ。森へ行くんだから、みんなと一緒に来てくれなきやア困るよ。」

け引つ返して、木の大きい枝や幹を山のやうに折り取つて来て、それを徑路へ横へて、荷馬車も馬も何うしたつても通ることのできないやうに、徑を塞いでしまひました。

若者が森の中へ行き着いた時分には、他の雇人どもは、もうすつかり荷馬車へ木を積み込んで、歸りだしてゐるところでした。

「お前たちはみんないくらでも大急ぎで歸りなさい。俺は今直きに追つ付くから。」

と、若者はみんなに云ひました。

それから、もうその先きへは行かずに、そのまゝ其所で地から大きい立木を二本引き抜き、それを荷馬車の上へ投げ上げて、家の方へと引つ返したのです。

徑路の口へ来ますといふと、他の連中は、塞がつてゐる徑を通ることができないので、みんな荷馬車を止めて困り入つてゐるのです。

「おい、何うだ。お前たちも家にゐて、もう一時間も寢てゐた方がましだつたんだ。何うしたつて、つまりは、俺がお前たちと同んなじに家へ歸るんだからなア。」

「行つちまへ。直き後から追つ付く。」

と、若者はかなり荒々しく怒鳴りました。

そこで、雇人のうちの一人が主人の支配人のところへ行つて、新顔の男はまだ、寢床にゐて、起きてみんなと一緒に森へ行かうとしない、と云つたのです

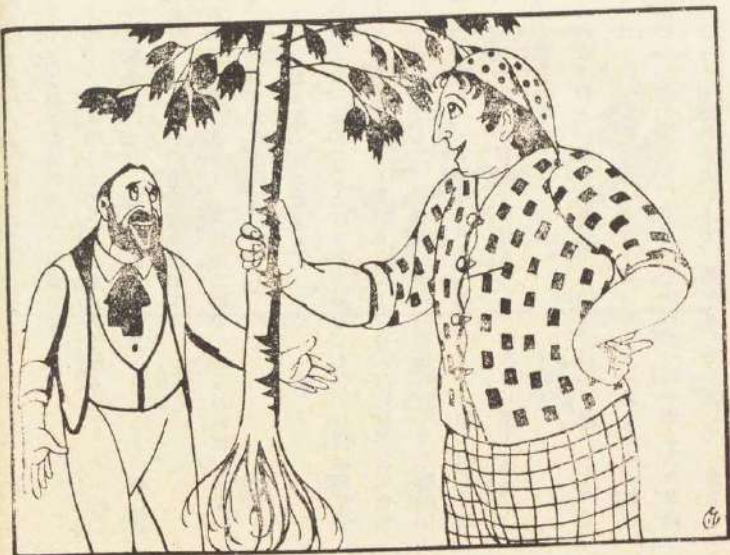
「行つて、直ぐ起きて、荷馬車に馬をつければいけないと、俺が云つたとあの男に云つてくれ。」

と、土地支配人が云ひまし。

けれども、そんなことはまるで駄目でした。巨男は寢たつきりて、何と云つても動きませんで、みんなに勝手に先きへ行けといふのでした。それで、みんなが出て行つて二時間の餘もたつてから、若者はそろゝ起きだして、畑へ出て行つて、豌豆を二つの皿に一杯摘んで、それを汁に煮て、それで、悠々と朝食をすましました。

それがすむと、若者は荷馬車に馬をつけて、森へと入つて行きました。森のとつゝきからさう中へ入らぬところに狭い徑路があつたのですが、若者はその徑路へ馬を牽き入れ其處をむかうへ出離れるといふと、馬を立たせて置いて、自分だ





若者は大聲でさう云ひました。それから、自分の馬もその塞がつてをる徑は通れないので、馬を荷馬車から解き放し、荷馬車に載せてあつた木の上へ馬を載せ、一人で梶棒をつかんで、まるで羽毛でもあつたかのやうに、徑に横につて居る木の上を軽々と牽いて通つてしまつてから振り返り、みんなにかう聲をかけた。

「何うだい。結局俺の方が先きへ家へ歸せ。」

それ 全くその通りでした。何故だといへば、みんなの方は、先づ徑を塞いでる枝や幹を取りつけてから、荷馬車を通さなければならなかつたからなのです。

畑へ歸り着きますと、若者は積んで来た木の一本の方を手で持ち上げて、支配人に見せながら、

「何うです、随分い、旗竿でせう？」

と、云ひました。

その後で、支配人は女房にかう云ひました。

「彼奴はなかく、抜け目のない男だ。結局、あいつは他のやつらよりも長く寝て置きながら、みんなより早く歸つて来た

ぢやアないか。」

二

若い巨男はとうとうその畑で一年働きました。それで、他の雇人たちが給金を貰ひに行く時分になりますと、若者も始の約束通りにさせてくれと、支配人に申し込みました。所が支配人は、もうその時分には、若者が恐ろしい力の強い男であることを知つてしまつたので、そんな力の強い腕で力一杯なぐられてはたままるものではないと思ひ、さればと云つて、かれこれ云つて、若者と喧嘩するといふ勇氣もありませんでしたので、何とかして、その約束をあやふやにしようと骨折りました。で、自分は隠居して、自分の代りに若者を支配人にするが何うだとまで云ひました。又その約束さへ取り消しにして呉れるなら、何でも望み通りの物をやるとも云ひこみました。けれども、何と言つても、若者は承知しませんでした。そこで、支配人は、尚よく考へてみるために、二週間の猶豫を請うたのですが、若い巨男は、それでは二週間だけ待たうと云つて、承知しました。

そこで、支配人は、自分の雇人や、隣人たちをみんな呼び

集めて、何かい、智慧があれば貸してくれと頼みました。書記たちは、やゝしばらく考へてゐましたが、やがて、まるで人間が蚊を叩き潰すやうに、唯つた一撃で人間を叩き潰すことができるといふやうな男がこの領地の雇人のなかに居るやうでは、誰の生命も安心だといふことはできないと云ひました。で、彼等は、たうとう、その巨男に水の溜れた井戸の掃除を云ひつけて、その男が中へ入つて居るところへ、上から大きい石を幾つも投げ込めば、それで、その巨男は、またとこの世の目の目を見ることはできなくなるに違ひないと相談を極めてしまひました。この策略はひどく支配人の氣に入りましたので、早速若い巨男に云ひつけて、井戸の中へ掃除にと入らせました。

で、若者が井戸に入つて居るところへ、上から大きい石を幾つも押し込んで、これならば、流石の巨男もきつと押し潰されたに違ひないと思つてゐました。所が、巨男は一向平氣らしく、

「鶏どもを追つてくれ。井戸の傍で砂を掻き飛ばすと見え、砂が俺の眼へ入つて、何にも見えないで仕事ができん。」



と、井戸の中から怒鳴るのでした。

「シツ。シツ」と、支配人は、鶏を追つて居るやうな聲を出して、胡麻化してしまひました。

そのうちに、

直きに仕事を終つて、若い巨男は井戸から上つて来てかう云ひました。

「何うだ、いい首飾だらう。」

見ると、大

きい石臼が

つ若者の頸か

らぶら下つて

るたのです。

それから後、

者は一人もな

いですよ。」

と、粉挽場

の持主が云ひ

ました。

「いや、そんな

ことなんぞ一向

に構はんですよ。

まア家へ歸つて、

と、若い巨男は云ひました。

「うん、あいつは、

何うしたつても、

暗くならないうちに、

あれだけの穀物を粉に挽ける

氣遣ひはない。だから、いよく

今度こそあいつの運の盡きなんだ。」

支配人はさう心の中で思つたのでした。

若者は又約束の實行を求めました。けれども、又もう二週間待つてくれと頼みまして、もう一遍智慧を借りるために、書記やその他の人々を呼び集めました。そこで、人々は、その

地のなかに、行つた者は誰も歸つて来ない化物

粉挽場があるのだから、其所へ夜粉を挽きに、その

巨男をやらうではないか、と云ひだした。

此のもくろみも支配人の氣に入つたので、早速

巨男を呼びにやつて、粉が急に足りなくなつたか

ら粉挽場へ行つて、袋の穀物を晝間のうちに粉

に挽くやうにと云ひつけました。

若者はすぐ納屋へ行つて、二袋を右の衣籠に入

れ、もう二袋を左の衣籠に入れ四袋を自分の合財

袋に入れ、半分を前、半分を後にといふ風に引つ

しよつて、化物の出る粉挽場へと出かけて行きま

した。

「暗くならないうちにそれをみんな挽いてしまは

ないぢやア駄目ですぞ。この粉挽場には化物が出

るでな。一晩ちう此所に居つた者で生きて歸つた

の上へ腰を下しました。少しさういふ風に坐つて

居るといふと、戸がさつと開いて、大きい卓子が

ひとりですつと入つて来ましたが、その上には

誰が持つて来るのか見えなくて、麵包、酒、その

他のご馳走が幾皿もひとりで載りました。若い巨

男は腰掛を少し後へ引きまして、じつと見て居ま

すと、先づ誰のとも分らぬ指だけが見えて、それ

から食刀や肉叉を持つた手が見え、やがて、さま

ざまなものを盆の上に置く手が見えたが、人の形は少しも見

えませんでした。

やがて、若い巨男は腹がへつて来て、卓子の上の晩飯の支

度が如何にも旨さうに見えたので、たうとう、卓子について

そのご馳走を十分に味はつて、好い心持になりました。さう

いふ風にして、若者が食べてしまひ、他の盆や皿が皆空にな

つてしまふや否や、不意に、部室のなかの燈がはつきり聞え

るやうなバツといふ音でもつて吹き消されてしまひ、眞暗

のなかで、若者の顔を何者かの拳固のやうなものが一つガ

となぐりました。



三

巨男は、粉挽場へと駈け込んで行つて、挽臼の中へ穀物をふるひ返んで、挽きにかゝつたのですが、夜の十一時の時計が打つといふと、粉挽場のなかのと或る部室へ行つて、腰掛



「やア、もう一遍やつてみる、今度はなぐり返してやるぞ。」  
と 若者は怒鳴りました。

で、二度目の拳固が顔へ當ると、若者はすかさずなぐり返しました。それから、その次のやつに對しても、直ぐなぐり返へしたのです。さういふ風で、一晩ちう續けたのです。拳固の二つびとつに對して、若者は右を打ち、左をなぐるといふ風で、夜が明けるまで、せつせとなぐり合ひを續けました。所が、東が白むと共に、何もかもバツタリ靜になつてしまひました。



が、若者が平氣で生きてゐるのを見て、全く驚いてしまひました。

「あゝ、昨宵は實にいふこ馳走を食へましたよ。随分太くなぐられはしたけれど、此方からも同んなじやうに容赦なくなぐり返してやつたんです。」  
と、若者は云ひました。それを聞くと、粉挽場の持主はひどく喜びました。もうそれで化物は出なくなる事が分つたからなりました。主人は若者にたくさん金を禮にやらうと云ひました。

其所で、若い巨男は粉の袋を被いで、畑へ歸つて、支配人に、もう何もかもすんでしまつたのだから、約束通り、支配人をなぐることにしようと思ひました。

支配人はそれを聞くと非常に恐れてしまつて、何うしていいか分からなくなりました。恐怖のために顔から汗をたら／＼流しながら、部屋のなかをあつちへ行つたりこつちへ行つたりしてゐました。やがて部屋へ風を入れて、それに吹かれようと思つたのでせうか、支配人は窓を開けました。

すると、彼が氣がつかぬうちに何時の間にか、若い巨男が、支配人の後へ行きました。そして、一蹴で彼を窓の外へ蹴飛ばしたのですが、支配人はだんだん高くあがつて行つて、たうとう姿が見えなくなつてしまひました。

若者は、そこで、支配人の女房の方へ向いて、  
「お前の亭主が歸つて来ないのだから、約束の通り二つめはお前をなぐる。」と、云ひました。  
「いゝえ、いゝえ。それは駄目です。私なんぞ、あなたにぶたれてはとて生命がありません。」

けれども、若い巨男は、  
「金銭はいりません。私は充分持つてゐます。」  
と、云つて断りました。

と、支配人の女房は泣きだしました。で、矢張り恐怖のために汗が顔からたら／＼流れたので、開いた窓のところへと駈け寄りました。

が、若き巨男は、そんな事で自分のしようと思ふことを思ひ止まりはしませんでした。で、直ぐ支配人の、女房を蹴飛ばしました。女だと思つて餘程軽く蹴つたのですが、それでも、女房は良人の後を追つて空を飛んで行きました。女の方が身體が軽かつたので、良人よりすつと高く飛んで行きました。良人は女房を見て、早く自分のところへ来いと呼び立てたのですが、女房の方では又良人の方へは行けないものですから、何うぞ自分の方へ来てくれと一生懸命に頼んで居るのです。

けれども、それは何にもなりません。彼等二人は何ちからとも一緒になることができずに、何時までも空に浮んで居りました。多分、今でも矢張り其所に浮んで居るのだらうと思ひます。  
其所で、若い巨男は、太い鐵の棒を、杖に突いてまた先きへ出かけて行きました。(ちほり)



おびんつる

(名所めぐり童謡の五)

野口雨情

観音さんの おびんつるは  
鼻を撫でられる

撫でられ 撫でられ  
鼻びく おびんつるになつちやつた

観音さんの おびんつるは  
顔を撫でられる

撫でられ 撫でられ

顔なし おびんつるになつちやつた

観音さんの おびんつるは  
顔なし鼻びく おびんつる

(浅草観世音の拜殿におびんつるあり、祈願して撫づれば其個所の病癒ゆといひ傳ふ)





# 福島と仙臺より

講師 沖野岩三郎

▽二月二十八日の午後十時  
廿二分に、こつそりと福島  
へ下車したのですが、もう其所には福  
島民報の齋藤さんや松江緑さん達が迎へ  
に来てくれてゐました。

▽三月一日の午前は尋常一、二年生千  
五百名が公會堂に集つて、そこで話しま  
したが、私は失敗だ！と途中で思ひまし  
た。しかし子供さん達は喜んでしまし  
た。午後は尋常五年以上高等小學校全  
部二千三百名といふ大勢で、話す私も満  
足しました。この中の幾分は、曩に附屬  
小學でお目にかつた子供さん達でした  
から大變歓迎されました。

△四時から學半塾といふ私塾の卒業生在  
學生の同窓會員二百名に對して講話をし  
た。お話をいたしました。私の病れてゐ  
る爲めか、子供さん達が私の言葉にわか  
らない所があるのか、私には不成功の講  
演でした。

▽午後一時半から千三百人ばかり集りま  
した。此の講演も七八分の成功で、どう  
も私と子供さん達とは、しつくり合ひま  
せんでした。けれども、おてんとさん社  
の子供さん達のお芝居や獨唱は實に立派  
なものでした。

▽三月四日、午前九時から公會堂で日曜  
學校を開きました。集つた子供さん達は  
三百人、大人が四十人でした。其中には  
栗原郡といふ十三里も遠い所から來られ  
た伊東嘉市郎さんといふ童話話者に熱心  
なお方がありました。

▽おてんとさん社の子供さん達が、いろ  
いろ合唱や獨唱、それからお芝居をしま  
した。みんな面白く、本當によく出來ま  
した。仙臺の子供さん達はお歌が大變好  
きで、お上手です。蛭子英二さんは東北

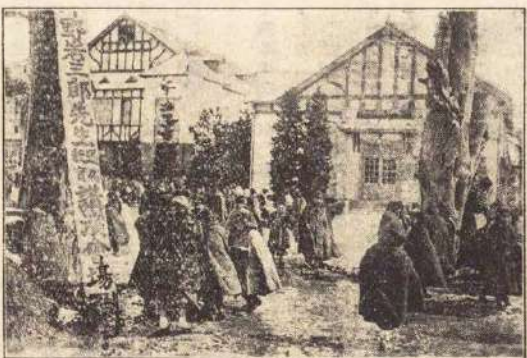
ました。

▽六時から大人ばかり四百名程公會堂に  
集つたので、私は「人生問題の一考案」  
といふむづかしい題で話しました。此日  
の聴衆總計四千四百名。

▽三月二日の午前十時から公會堂で尋常  
三、四年生千五百名集りました。午後零  
時半から成蹊女學校へ行つて、五百名の  
學生にエステルのお話をしました。そし  
てお晝飯の御馳走になりました。

▽二時前から羽二重會社の女工さん達三  
百名に對して「迷法子」といふ私のまた  
一度も話さないお話を致しました。お婆  
アさんも娘さんも聲をあげて笑ひました  
三時から女學校中學校師範學校商業學校  
の生徒さん達千名が集りました。童話に

學院の學生さんですが、熱心に童話を聴  
つてゐます。私はエステルのお話をしま  
したが、昨日よりは面白く話されました。



(講演會當日の福島公會堂の門前)

▽午後一時半から五百人程の子供さん達  
と、五十人程の大人の方と集つて、私は

ついでの意見を話しました。大人の皆さ  
んは、靜に聞いて下さいました。

▽六時半から市民一般の人達凡六百名程  
集りました。私は、前夜の續を話しまし  
た。此日の聴衆は總計三千九百名でした。

講演の後有志の人達から歓迎されて、樂  
しく語り合ひました。福島市での全體の  
集會は聴衆が、皆大變に喜んで下さいま  
した。そして此會の主權者は「親の會」  
といふ小學校の或一學級の父兄六十三名  
の團結した會でした。皆さんが非常に熱  
心に聞いてゐましたので、私も其の熱心  
に愛でて、大ぶん無理をいたしました。

▽三月三日、朝五時に起きて、大急ぎで  
仙臺へ來ました。文化生活研究會の窪  
田さん、東京朝日新聞記者の藤澤さん、  
宮城女學校の小野主枝さん、おてんとさ  
ん社の社員の人達に迎へられて針久旅館  
へ着きました。

▽午前九時半から公會堂で小學四年以上  
の子供さん達千二百人程に、十人の大勢  
一生懸命に話しましたが、仙臺へ來て、  
始めて自分の氣に入つた話が出来ると思  
つてゐましたが、最後の十先程前になつ  
て、子供さん達が、勝手に立つたり私の  
前を走つたりするので、私は残念だつた  
が、十分程話を残して打切りました。つま  
り仙臺の四回の童話は皆な失敗でした。

▽午後四時から六時まで、青年會の堀内  
眞澄先生と一緒に、東北學院の笹尾博士  
のお宅へ招かれて、愉快に話りました。

▽六時半から公會堂で大人の方が二百餘  
名集りました。東華新聞社長の小野平八  
郎さんが、藝術に就いてのお話があり、  
夫れから圖書館長の池田さんが「むか  
しむかし」のお話がありました。

▽私は二時間半程一生懸命に童話や童謡  
に就いて話しました。寒い晩でした。火  
の氣の無い冷たい會堂の中で、十時半まで  
皆さんは熱心に聞いて下さいました。私  
は仙臺へ來た甲斐があつたと思ひました  
會の果てたあとで笹尾博士は「是非も一



度仙臺へ来て、あの通りのお話を市民一般に聞かせて下さい、私は其の機会を造りますから。」と云つて、愛情に溢れた握手をして下さいました。

▽十一時前から有志の人達三十餘名と、仙臺食堂で歓迎會をして下さいました。宿へ歸つたのは十二時過ぎでした。

▽五日の朝十時に天江さん達に見送られて鹽釜へ向ひました。そして籤谷氏と高橋牧師に迎へられて小學校へ行つて六百餘名の生徒さんにお話をいたしました。

が、學校では童話を聴く希望では無かつた様子で、先生達の中には案外だといふお顔をしてゐられたお方もありました。また鹽釜は精神講話の領分で、童話の境へは可なり距離があるやうに思はれました。

▽其晩は町の新築教會堂で、三百人程の大人に三時間の長い講演をいたしました。教會員の美しい合唱を聴かせて下さいましたのは、此の旅行中の嬉しい思い出です。

來事の一つでした。

▽六日の正午に宮城縣刈田郡の白石驛へ下車しました。同地の青木八郎氏は仙臺まで迎へに来て下さいました。停車場へ

は同地の牧師青名武雄氏が来て呉れてゐました。學校へは横山郡視學、宮城縣會議長の巨理晋氏を始め、新聞記者の大岡川村、寺内、高子の諸氏が見えました。

大きな講堂には商業學校や中學の生徒も見えてゐました。そこで二回のお話をしました。

▽二本松では小學校の加 哲壽氏や電氣會社の菅野一郎氏に迎へられて、同夜小學校で婦人會の人達三百餘名にお話を致しました。

▽七日の朝は第二小學校(男子部)で十時から十二時半まで二回話しました。生徒さん達は熱心に聴きました。午後は第一小學校で、尋常一年から高等科まで皆一組にして、一時間餘りの長い話をしました。



童謡

野口雨情選

(大人篇)

夜まはり

カチカチカチと夜廻りが  
暗い通りを 通る時  
私は寝ながら かぞへます  
一二三と かぞへます。

寂しい夜の 夜廻りが  
遠くへ消えて 行く時は  
お人形さんも 数へます

鶏頭が咲くころ

鶏頭が咲くころ  
赤いころ。

越後のくすり屋  
すけ笠で  
風船玉を  
持つてくる。

鶏頭が咲くころ  
赤いころ。

ちんば犬

黒犬ちんば犬  
野良犬が  
雪の降るまじ

歩いてた。

白い雪の上を  
黒犬が。

ひよつくりひよつくり  
歩いてた。

闇夜

お空が疲れて  
寝てるよ  
黒いふとんを  
かぶつてる  
怖い駢の  
風ばかり。

足跡

遠浅 小浅  
どこまで遠い

ましたが、皆な喜んで歩いてくれました。▽八日は午前中に福島縣の本宮町へ行きました。町長の小松茂藤治氏や、小學校長の篠山廉氏部視學佐藤一等に迎へられて、同町の劇場で、小學校と實科高等女學校の生徒さん達千四百名に話しました。警察署から部長と巡査二名が聴きに來てゐました。昨年の春、平和博覽會の平和館で私が話した時、聴きに來てゐた巡査さん達は、私が面白い事を云ふと腹を抱へて笑ひましたが、本宮の巡査さんは、どんなにしても、ちつとも笑ひませんでした。

▽午後七時から小松氏の別邸で婦人會の主催で講演會をいたしました。二百名程の會衆で、最後の講演でもあり、私は十分にお話する事が出来ました。

▽九日の朝九時に、佐藤郡視學、小松町長、篠山校長、日曜學校の菊田芳夫氏と停車場でお訣れして東京へ歸りました。八日間に二十九回の講演をしましたのでさすがの私も少々頭が疲れました。

足跡三十

まだ／＼つゞく

足跡七十

まだ／＼遠い

遠浅 小浅

どこまでつゞく。

はれぐ

歌の春

雨ははれん、晴れました  
巢つくり雀がチユン／＼、  
柳をゆり／＼ないてます  
しづくをゆり／＼啼てます。

冬の日あたり

もみながら小からを  
ふみながら  
雀がチユン／＼  
相撲とつてる



たまつころになつて  
相模とつてる。

夕ぐれ

西岡青葉子

蛙がなぐから  
かへろ  
私もおうちへ  
もうかへろ  
淋しくなるから  
かへろつて  
蛙がなぐから  
かへろ。

赤い椿

志村 麗子

お陽さま、ぎんぎら  
空の上。  
まつかな、つばきも  
ぎんぎらり。

はなれ島

大塚 一也

私の作ったはなれ島  
さら／＼砂のはなれ島  
島の上にはりんどうの花を一本さしましたよか。

電気

多田 久野

てる／＼ばうす  
てるほす  
雨もふらないのに  
かさかぶり  
おへやちうを見はりばん。

西洋人形

寒竹 進

西洋人形のマリーさん  
あなたはどこから  
来たのです

お陽さま、お空で  
ぎんぎらり。  
つばきも、ぎんぎら  
窓の上。

雨が降る

島崎安太郎

お庭に忘れた  
まゝことの  
お人形さんに  
雨が降る。

お月さん

伊藤正之助

お月さんはお空の

遠い／＼ロンドンの  
町から船で  
来たのです。

きのこ

沼田トミヨ

石の間から  
きのこが一つ  
雨がふるのに  
かさすほめてゐる。

冬の夜

鈴木 英雄

一吹き風が  
ふいたらば  
雲のかたまり  
やつて来て  
三ヶ月さんを  
なくなした

月見草

どこかの犬がほえて居る

お百姓さん  
お空に星の  
種まいた。

お芽々が  
はえました。

お月さんよ  
お百姓さんよ  
にこ／＼さん。

金魚

堀 孝受

お魚々々  
お前の着物は

月の出るころ  
ボツカリと  
月見て白い  
月見草。

三日月さん

倉田真一郎

お月もお星も  
お花も白い  
みんな 眞白く  
浮いて居る。

お月様

柴田 純三

お月様よ

よい着物  
水の中に居つたなら  
きれいな  
着物がよごれるよ  
をかへ上つて  
ほしなさい。

猿の尻

松井 秋爾

親猿小猿  
猿の尻赤いな  
どうして赤い  
赤い柿たべた。

春

糸井譽太郎

楽しい春が来るか知ら  
淋しい里にも来るかしら  
淋しい里に来たならば  
きれいな花が咲くか知ら。

寒いのに  
僕の羽織を  
借してやろ  
甘酒一杯  
進せうか。

春が来た

篠崎 喜吉

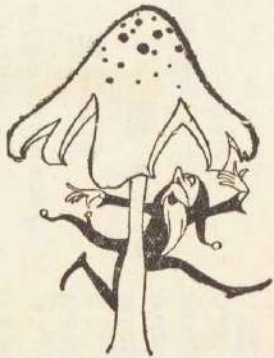
私のすきな  
春が来た  
草木のすきな  
春が来た  
お山の木の葉が  
顔出した。

えんびつ

西村としを

えんびつ／＼  
をれるなよ  
おまへは  
ほそいぞ  
なくなるぞ。





幼年詩

若山 牧水選

山びこ (賞)

和歌山縣西牟婁郡串本牧水選 矢倉チヅ

山の中の山びこよ 町へでて来い

出て来い

評、何といふ可愛い、呼び聲ませう。

雀 (賞)

香川縣木田郡水田牧水選 谷岡安男

水色ガラスのま向ふに

夕暮すやめがとびました。

評、雀のすがたのかげゆさよ。(牧水)

日暮里 (賞)

東京府日暮里 第四學塾五 小林はな子

工場の笛で夜が明けて 工場の笛で日が暮れる 日暮里町はさびしいな

評、さびしい町がこの歌の調子の中に繪の様に入っています。(牧水)

うさぎ

徳島市富田校尋四 公門文子

白い白い真白い 目玉のあかいうさぎ 少しの音にも真白い 長い耳をびんと立て 小屋の中から外を見て びよんびよんはねる白うさぎ

評、これもその可愛い、兎を見る様です。(牧水)

荷車

愛知縣岩倉校尋五 森すみ子

綴方

編輯部選

周やの死 (賞)

府下西果嶋町 町度申嫁 日向も

私がおばさんの家にゐる時の事でした。ちやうど日曜日で近所の子供もあそんで居ました。私も小さい子供をあそばして居ました。姉さんは家の中で私のじゆばんをぬつてたのですが、電車通りからかけて来ました。あたしは飛んでいつて、「姉さん何所へいつてたの。」と聞くとももちやん……。」と云ふから私はまだなにか云ふと思つてましたが、なにもいひ出さないで、私は「姉さん何所へ行つたのよう。」と云ひました。姉さんは「周やが死んだよ。」と云つた。私はおどろいてしまひました。私の一番大切なばあやなのです。先から體がよわくて、病氣ばかりしてたのですが、とうとう死んでしまつたのです。私はなかく／＼ほんとに出来なくて、半ば心配でたれに聞いたの、だれにあつたの。」姉さんは「電話、お母

さんから電話。『私、ふん。』あとにはなんにも云はずに、おばさんの所へかけて行きました。そして、「おばさん、周やが死んだよ。」おばさんは「死んだの、かはいさうにね、去年来たのが終りだつたね。」という話をしました。

あくる日、あたしはお母さんの所へ歸りました。そして御香料と書いた紙の包みをもらつて、電車にのりました。見おほへのある町をすゝと通つて、麻布の櫻町にきました。だん／＼おなかのへんがくすぐつたくなつてきました。周やの家の前へきた時、もうもじ／＼しずにはゐられない程でした。『今日は。』と云つた聲もくすぐつたかつたのです。

その時出て来たのは周やのお母さんでした。『まあまあ桃ちゃん。』と目からたんと涙がでてきました。『さあおあがり、周やもあいたがつてたが——おそかつたもう。私はたゞ死んだのか知らと思ふだけでした。お棺のある所へ行くと、もう／＼へんな氣持ちでした。周やのお母さんは、『なあも、ちやん、おせんこをあけてお

くれ。お周もよろこぶでせうよ。』と云つたので、おせん香をあけてお香料をのせて二時間位あたしは、色々のことを思つてゐた。二時間から、多ぜいの人になつたのでお棺を出させよう、親類の友達、さうだんして、お部屋の中に出してきて。そして、『も、ちやん、お出で。周やを見せてあげるから。』と云つたのであたしは親類の人達の中にはひつた。小さいお棺の中に青白い周やの顔を私はの

初荷 (賞)

山梨縣大月廣里東校高二 小宮時子

ぞきこんで、たうとう泣き出しました。二度と見られないと思つて、よくよく見てゐましたが、皆がふたをしてしまひました。そしてけん／＼わんにはこんでいつて、おさう式のお棺に入れてしまひました。皆は見送りの爲め外へ出ました男の人が三人あつてついていきました。皆は手をあはせてをがみましたが、私は心の中でさよならさよならといひました。



人物 (賞) 東京小石川區高田老松町十六 高木くに子

ワァー／＼と餘りさわがしいので外へ出たきれいに着飾つた馬の運送がいく臺も續いて来る。荷の上には白い旗を立て、蜜柑箱が一つつある。蜜柑をまくぞ。子供達はうれしそうに、さわぎながら、車のまはりに集まる。私、ひろちや



お日横山へ上るころ  
にぐるま澤山でかけます  
お日横山へはひるころ  
にぐるま澤山かへります、  
群、山の麓の静かな村よ。(牧水)

赤ちやん

福岡縣八幡市 千葉 佛  
前田官舎尋五  
僕は赤ちやん大好きだ  
なぜか知らないが  
あのあまいにほひや  
小さいお手々や  
可愛い、お目々か  
大好きだ。  
群、喜んであるあなたの顔が見えます。  
(牧水)

馬

和歌山縣日高 切山 角次郎  
那南谷校尋四  
馬さんく  
土を掘つたれば  
金銀さんじが  
出るのかよ。  
群、なんにも出れえ、ヒ、ン。  
(牧水)

日記

東京府下日暮里 遠藤 克己  
第四校尋五  
今日は何を附けようか  
試験があつたと附けませう  
群、たいてい出来たとつけませう。(牧水)

雨

茨城縣眞壁郡 田宮 君子  
若柳校尋四  
雨がちらちら  
ふつてきた  
たよこのせなかが  
ぬれてゐる。

もるもつと

東京府下日暮 大庭 汪  
里第四校尋五  
もるもつとが、ちゆうくくと  
ないてゐた  
どうしてそんなになくのかと  
箱のふたをあけたらば  
一匹のもるもつと死んでゐた。

夜中

愛知縣岩 大橋 市  
倉校尋五  
ちいさん  
ぐつすり

ん拾つてやらうね。「ひろちやん」「あーば  
ー」勝ちやん、蜜柑をまく。拾ふだ。  
拾ふだ。天さわぎだ。運送屋は箱から蜜  
柑を出して、ばらばらまく。子供達は夢  
中になつて、蜜柑のいく方へ玉でもころ  
がすやうに飛んで行く。泣き出す者もあ  
り、おれのだおれのだなんてさわぐ手も  
ある。「おつちやんく、こつちく、」  
れ、川へ落ちた、早くとめろ。「わ  
つ」あは、ま、目、勝手な事を言つて  
泣いたり、笑つたり、さげんたりする。  
下ではこんなにさわいで、ま、ま、人は案  
外氣樂、むしやく、蜜柑を食べながら、  
家の中へはふりこんだり、わりと遠くへ  
やつたりする。やつと私の前へ運送が來  
た。皆蜜柑をたくさん持つていそいそし  
てゐる。ばらばら上にある人が私の方へ  
なけてくれた。やつと拾つたと思ふと、  
他の人に拾はれてしまつた。私、さ勝ちや  
ん、「勝ちやんやあ蜜柑々々、」うれしさう  
に家の中へはふりこんだ。運送はだんだ  
ん上の方へ行く。子供もぞろぞろ後をつ  
いていく。ま、ま、人は「れ、子供、あれ、  
このおつちやんのはでかいぞ、ぼんとに

八四  
こんどのは大きい。ころく、私の前へ大  
きい蜜柑がころがつてきた。私はひよつ  
と手を出して取つた。私の手の上からど  
こかの男の子が取らうとしたが私は直ぐ  
手をひつこめた。ころく、蜜柑がころが  
る度にびよつくと手が出てはそれを拾  
ふ。私はもう拾へないので、家へ入つた。  
皆の行つたあとの道には、ふみつぶされ  
た蜜柑だけが淋しさうに、かはいした土に  
はりついてゐる。

原稿を書いて居る時(賞)

京都府中郡 糸井 一郎  
三承校高二  
いつか僕が、原稿を書いて居ると、弟  
がのぞいたので、「人のものを見るな。」  
と云ふと弟は「そんな事ともなつとれへ  
んわ。」と云つたので、「何そんな事がある  
だ。」と云ふと、「だんない。」と云つて、ま  
だみて居るので、「お前のすることをせ、  
なア。」と云ふと、「何もせいでえいわい。」  
と云つたので、「そんならあつちへ行け。」  
と云ふと、「えだく。」と云つて中々のか  
ない。「お前はわしのごろみて、わしより  
早よ出すんだらう。」といふと、「ナニ、

雉子のお話

市外戸塚町 新津 眞佐枝  
源兵衛七六  
でも、だんないで、早よ入選しやいよう。  
と云つたので、賛成してやつた。  
匂ひがいやだから此の雉子をやると、  
親類から一羽の雄雉子をくれました。き  
れいなをりもの、模様はやうな羽根をさ  
すつて三四子はそれを抱いてやつたりし  
ました。「母アさまこの鳥どうして死んだ  
の。」とたづねました。  
「お山の中で雪が降  
つてたべものがなくて  
困つて居たのをれふし  
が打つたのさ。」「打つ  
たばかりで死んだの、  
打たれぬさきにとんで  
しまへばい、のにね。」  
「でもつばうの丸で  
打つたのよ。」「鳥はど  
こに居たの。」「木の枝  
にとまつて居たの。」  
「此鳥親があるの。」「あ  
るかも知れないよ。」



花びん(賞)

横浜市東神奈 金子 多代子  
川橋校尋五



ねたころに、  
すゞめも  
ぐつすり

ねたころに、  
びつしより  
びつしより  
雨ふり出した

### あられ

熊本縣益城郡 清原 キヨノ  
海東校尋五  
おられがふる  
小さいあられが  
私の頭にふる  
となりの人の頭にもふる。

### 弘前の雪

弘前市新町 坂本誠 四郎  
あの 春が  
いつ来るだべな、  
雪消し機械が  
あればえゝなあ。

### もず

香川縣木田郡 田井 明  
水田校尋五  
田圃のあぜのはんの木に  
百舌鳥が  
キイキイキイとないてた  
ねずみがほしいと  
ないてゐた。

### 久米池

香川縣木田郡 平井 葵  
水田校尋五  
大きな久米池  
ひあがつて  
魚とり舟は  
さびしさうに  
はたのすなじで  
ねむつてた。

### ぜに

和歌山縣東牟婁郡 中尾 はま子  
郡明神校尋四  
みちのはたに  
ぜに一せん  
だれがおとして  
いつたのか  
ひとりほつちで  
おちてゐる。

日向もも 東京府杉並村天沼末世福音社 日向もも子



泣き出しました。そしてお母アさまの手すがりついで、「そんなことをしちゃいや〜。」とめてはなれませんでした。お母アさまも私もあはれになつて、とう〜、雫子は其のまゝ、れうりしませんでした。夜おとうさんが三四子をやすませてのちれうりしました。

### 恐ろしかった時

山梨縣大月廣遠山愛子  
里東校高二

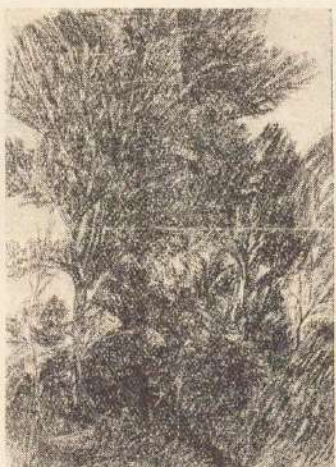
『しんばいしてゐるでせう。』「それはしんばいしてゐるでせう。母ア様とそんな問答をして、三四子はふしぎにうつくしい鳥を、童謡のやうなことを歌つて抱きあゐるに居ました。其うちに母アさまは毛をとつてれうりするのだとむしろを出して来ました。そして雫子のお腹をさすりながら、「ほんとにかはいさうだね。」とむいておくれ。」と云つて、羽毛を足の所からぬきとつた。三四子は顔色をかへて、

### 四年のくせに

臺北市 武藤 珍子  
旭校

が起きてきて、「今の音はなんだ。たしか、ガラスのかけた音だつたな。」と言ひながら、電氣をつけて、そこいらを見廻はした。けれど家の中はひびひと少しくも、こはれた様などころがない。私は一人ふとんをかむつて、早くなんだか、わかれぼよいと思ひながら、體はまだふるへてゐた。そのうち、やつと、その物音の出場所がわかつた。それは兄さんが寝ほけて、陳列だなの硝子を蹴つて、こはしたのとわかつた。私はそのわかるまで、

私の姉さんは恒子と言つて、臺北第一高等女學校の四年生です。そして私に女學校の自慢ばかりします。私が姉さんの事を一寸笑ふと「珍ちゃんまいきになつたね、笑ふなら女學校に入つてから私の事を笑ひなさい。まだ四年のくせに。」なんて言ひます。私は「四年のくせに」と言つても、姉さんだつて四年ぢやないの。」と負けずに口返事をしますと、「違つてよ小學校の四年の事を言つてるのに。」とぶん／＼してゐます。私は、姉さんは女學校の四年生と小さい聲で言ひますと、姉さんは「小學校」「小學校」「小學校」といひます。そこで私が姉さんに聞えないやうに、「じよう學校、小學校ににこりをうつただけの學校の四年生」と言つたつもりが姉さんに聞え



もみち寺 東京府西巢鴨町 半田 光一  
第一軍校尋四



書ぞめ

東京府下日 小野 壽一  
暮里第四校

けうしつに  
一面にお書ぞめが  
下つて居る。

雪

香川県木田郡 堀上 常太郎  
水田校尋五

ひろいひろいお空から  
白い雪の子が  
まはりまはりまひり下りる。

鳩

香川県木田郡 一宮 ヒサエ  
水田校尋五

お寺のかどへゐて見ると  
鳩がたくさんおりて来た  
何もやらのにおりて来た。

雪

香川県木田郡 宮武 シズ子  
水田校尋五

サラ／＼と雪が降る  
お家の上は真白で  
山は一つも見えませぬ。

地藏さん

岩手縣神籠坂 川村 富子  
校附屬尋六

田の中の地藏さん何ごすきだ、  
なつてもかつてもすきでない、  
どんぢよけすきだ。

しも

和歌山縣那賀郡 林 房一  
南野上校尋三

しもの下で  
ごはんをたいてる  
ひるのごはんか  
朝のごはんか

しもばれ

和歌山縣那賀郡 玉川 きぬ子  
南野上校尋四

手にしもはれた  
畑のみかんが  
なくなつた。

のはら

山形縣山 長岡 トク子  
邊校尋四

のはらは  
ひとりばかりで  
のはらを通る人をみてゐる。

静物 滋賀縣蒲生郡 村田 良三  
市邊校尋六



八八  
さんでも外にでると本當に仲  
のよい姉妹のやうな風をする  
ので私は何時もをかしくなり  
ます。

くまさん

市外千駄 村瀬 英武  
ヶ谷原宿

くまさんとふのは、おむ  
かひの、さかなやさんの黒い、  
小犬です。僕がコノアイダ門  
の所に遊んでゐましたら、く  
まさんがゐりましたから、  
「くま／＼。」と、よびました。

て「いゝわおほえていらつしやいよ。」と  
ふすまをビシヤンと締めてさしきの方へ  
行きました。「私は聲だから聞えないわ。」  
と大きな聲で言ひますと「生意氣な人。」  
と向ふの方でも言つてゐました。姉さん  
は「なまいき。」といふ言葉が口ぐせです。  
そこに古山さんがあそびにいらつしや  
つたので、姉さんはだまつてしまひまし  
た。  
私は帽子をかぶるとすぐ古山さんのお  
家に行きました。「こんないちの悪い姉  
やりました。くまさんは、こんどは、をどり上  
つて、とびかゝりました。そしてたうとう  
虫を食べてしまひました。僕は、まご  
んが、はかなければよいがなと、心配しま  
した。  
さかなやさんが、もし、僕がやつたお  
せんべいが、あつたのだらう。など、  
思ふかもしれないと、思ふと、僕は、そこ  
に、いられなくなつて、家の中へ、逃げこ  
んでしまひました。

かしわやの前

京都市下京區 西 村 豊  
八條四ツ條

霜の降る寒い朝だつた。或る小さ  
なかしわやの外へ大きな荷車が止まつて  
車の上からはとりを一つばいに入れた  
かが降ろされた。にはとりがやかまし  
くなくて居る。

かしわやの男が、何かコソコソ調べて  
ゐたが、其の中に家の中へひきすつて行  
つた。にはとりはまだないて居る。あ、  
あのとりもいづれ羽根をむしられて殺さ  
れるのだと思ふと可愛さうでならなかつ  
た。にはとりがくびをしめられて苦し  
うな聲をあげて死んでゆくのを思ひ出す  
とひとりでに胸がせまつて来て身體が細  
くなる様に思ふ。

石の様にたたくこぼつた、水溜の上を  
荷車はカタ／＼と輪の音を立て、去つ  
て行つた。冷たい風がよ／＼やなく吹く、  
まだにはとりの聲が聞こえて来る様に  
思つた。



お手ふり 奈良市長地町 岩田 花枝  
第二校尋四





通信

自由畫選評

山本鼎

△村田良三君の『静物』でも、福壽草でもよくかけて居るが、バツタの色がめちやです。そのけば、少し紫ケレオン其のまゝの色は困ります。静物を描いて、さてバツタの段になると、静物にはおまひなしに、やたらな色をバツタに塗り込んでお目です。静物とバツタの色とをよく見た上で、見えたりうな色なり濃淡なりをつかふのです。もし實際のバツタの色が、いやな色だつたら、好きな色のバツタに其静物を置きかへてお描きなさい。△牛田光一君の『みちみち』大きなクレヨン畫で、かなり骨を折つたものです。下半景は力がはびつて居るが、上半景に力がわけて居ます。左半の大切な樹が、平べつたのでいけません。かういふ樹の寫生畫にはもつと丸味が出てほしいです。影、日向、なまもつたかたまり／＼に物を見てゆくといふです。

幼年詩選後

若山牧水

今度はいへんに静かな、上品な歌がそろひました。矢倉さん、谷岡さん、小林さん、公門さん、森さんたちのを初め、いつたいに皆さうでした。別に曲讀はついてゐなくとも、とりでに調子をつけてうたへるものばかりでした。いゝことでした。これらの中から推薦の部へ出したいと思ひましたけれど、前號分が残つてると思ひましたので、見合せました。推薦されたと同じものと思つて下さい。今度集つたものがあまりに多かつたのと、新巻しく私が病氣であつたため、三分の一は

綴方の選後に

選者

かりを来月號分に残しました。来月號分といふに選みまます故、待つて下さい。△先月一と月お休みにしたので、集つた作の數は實に薄山でした。いゝ作は相變らずありましたが、中で一二特にすぐれた作を見出す

懸賞募集少年少女自作童話當選發表

一月號募集の少年少女自作童話は五百二十六篇といふ驚くべき多數でありましたが、嚴選の結果、左の三篇が當選作と決定いたしました。(佳作は前月號で發表してあります)そして、一等、二等の内二篇を五月號に掲載しました。

- 一等『蟹の仇討』.....長野市千歳町十二 荒木 脩
○二等『小雀の恩返し』.....熊本市新屋敷町 林田 三男
○二等『百日草とコスモス』.....奈良女子高等師範學校 附屬校 神田 鶴枝

です。どれも捨てるのが惜しいものばかりでこの出来たのは、うれしい氣がしました。例の通り目についた作について感じたことを述べて見ます。△日向も子さんの『周やの死』は感動を與へずにはおかない作です。息もつかずにおしまひまで讀ませられる程、力のこもつた作でした。『周や』の死を聞いて驚くと、ころも、なかなかよく書けてゐますが、それよりも『周や』の家へ行つてからの事が一層よく書けてゐます。

自由畫掲載外佳作

- △完一さん(河島浩) △如さんのさいほう(野間保彦) △機類(平石操子) △常夏(伊藤登良男) △自轉車(清水ふさ子) △驚の刺製(高木しげ子) △女生徒(高木しげ子) △松と福壽草(伊藤登良男) △どひんと茶わん(高松善二郎) △ならんでる子供(高木くに子) △自畫像(高木しげ子) △梅に髪(向井留次郎) △吾家の夕食の仕度(矢名氏) △筆洗と電筆(漢守一) △木つまき(吉池隆志) △樹木と家(吉村照男) △杉並村(山崎正雄) △顔(政田完一) △梅原先生(河島浩) △詩樓を着た人(西賀正) △銚子大夫崎(横田源次) △朝鮮人(安井キヨシ) △坐つた人(河島浩) △家(秋津見清) △三時頭(武藤敏) △たこあげ(向井かよ子) △人物(河島浩) △悲み(高木しげ子) △英語の勉強(野間保彦) △妹(岡村三郎) △池袋(加藤良夫) △學校の近所(加藤良夫) △枯(浅野三郎) △景色(友田久藤) △家のかほ(山田明) △風景(石岡元太郎) △鐘堂(松浦保) △家の門(深井正) △チユーリッパ(伊藤登良男) △筆たて(細野三郎) △河(大野郁哉) △たのみの太郎君(宮池太郎) △日の出(大澤夏江) △僕の手(宮内照) △花(桑原運郎) △千曲川(桑原運郎) △春の夕方(豊田正雄) △ドビソ(安井友太郎) △夏の朝(大伊達カズミ) △金の星(二册) △提灯(河島浩) △家(河島浩) △鈴木利明) △提灯(河島浩) △家(河島浩) △夜(吉越マサ) △はくは(上芝野) △おかけ(佐藤晴

幼年詩掲載外佳作

- △童の影(中山ヨキキ) △友だちが(上芝野) △兎さん(杉浦安一) △電氣のこぼり(松本百合子) △お月様(谷内静野) △筆筒(大石學) △家のあひる(湯本敏世) △うちの家(佐々木スカ子) △春(坂田ヨシミ) △うさぎ(山本一子) △すみやき(若野ヨシキ) △水車(吉田アキ) △さみしいこと(川村嗣子) △らんぶ(若野ヨシキ) △かき(岡本年枝) △屋根(澤本トシ) △すずめ(垂石すん) △たけ(堀綾子) △タケ(佐々木アチ子) △光り(宮武サダ子) △牛(初瀬マサエ) △こよみ(柳原芳郎) △私のおとさん(神田シズエ) △あかり(栗野俊三) △はりの中(赤荻秀子) △横濱にて(栗野俊三) △ゆめ(小野實之助) △かんの木(櫻井利子) △みぞれ(鈴木薫) △雲の朝(宮崎秀一) △ふい取(河正義) △すく(宮崎秀一) △菊つみ(須藤とく子) △かけこ(林田勉) △街を歩みて(山田すず子)

綴方掲載外佳作

- △私(秀谷島夫) △私の欲しい物(田中久子) △鉛筆(竹内いよ) △裁縫(厚見漢子) △宿題(安井涼) △ちくちく(武田静子) △先生から叱られた日(宮崎富夫) △水スベリ(石井文平) △寒くなる(栗原喜久代) △僕(たこ) (山本龍吉) △今朝の事(深井正三) △新給ひ(谷内静江) △隣りのおばあさん(谷内静江) △旅行の朝(大野麗蔵) △私の家のおひな様(城井安子) △嵐上げ(矢野氏) △猿組(大野順一郎) △小犬(瀧澤市太郎) △としより子供(石川正子) △湯屋で(廣岡喜代治) △正月休のお







ものは是非御送り下さい。待つております。  
○柴田さん 伊藤さん、今直ぐは困りますが私も約束をしますから、あなた方も約束を忘れないで下さい。きつとです。  
○下谷坂明〇〇〇さん、どうぞ重ねてお便り下さい。誌上では御返事も出来かねます。御注意を有難う御座います。  
○練木準さん、御注意を有難う御座います。

### 『金の星』誌友の創作募集

『金の星』は毎月童話、童話、及児童創作の研究雑誌として、四六判四倍大の美しい雑誌です。『小馬』を発行いたします。就ては下記の規定に従ひ、特に『金の星』の誌友の方々の創作研究を募集いたします。どうぞ苦心のお作を、どしどし、御投稿下さい。

- 規定……凡て『金の星』の創作募集と同様です。但し原稿に必ず『小馬』原稿とお記し下さい。
- 幼年詩……野口 雨情選
- 自由話……岡本 歸一選
- 童話……齋藤佐次郎選
- 児童の創作に關して……編輯部選
- 児童論、隨筆……編輯部選

以上の成績を得ましたのですが、交蘭社の都合で大變残念な折角の企ても中止してしまひました。  
或はまだいくらかは『青い鳥』は残つてゐるかも知れませんから、どうぞ直接にお問合せ下さい。  
交蘭社の所在は神田區仲猿樂町です。それから中止した前にも掲載を交蘭社の方へ差し

### 編輯室より

△やうやく春めいて参りました。全部の編輯を終へました今日は、丁度おひがのお中日です。近くの六阿彌陀様のお寺で撞く鐘の音が本當に春めいて響きます。皆様お変わりもございませんか。編輯員一同は、春が来たので、いよいよ元氣で参りますが、そろそろねむくなって来るのは閉口です。おやおや、もう誰だか向の机の方で眼をトロトロさせたりします。

### 『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典がございますが、先づ第一に童話童話及児童創作の研究雑誌『小馬』を毎月無代で差上げます。そして誌友に限り『小馬』に投稿の特権があります。向この外にもいろいろの御便宜がありますから、本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。早速にお送り申上げます。

尙、小島先生は、このお話の終り次第引續いてそれは、面白い長篇物をお書き下さいませ。△若山先生の童話ばすばらしい評判ですが、先生も、この頃特に童話と子供の詩に興味を持つやうになつたと言つておいて、先生の子供の詩の選も非常に評判になつて来ましたが、これは近く金の星出版部から一冊になつて機能的子供の詩集として發行になる管です。  
△神野先生は四月の牛からいよいよ、四國の講演巡りに出られます。

◇『金の星』は新しい時代の童話と童話を普及するために講演部を設けてあります。  
◇講師は、童話は神野岩三郎先生、童話は野口雨情先生が擔任されます。  
◇講演御希望の方は金の星社宛に申込み下さい。出張費用等お問合せのあり次第御返事いたします。——(係り)——

○東京 橋爪謙吾様 ○兵庫 山村俊治様 ○福岡 石川正文様 ○鹿児島 中野ツル子様 ○名古屋 水尾富士子様 ○名古屋 水尾隆彦様 ○横濱 野口はな子様 ○東京 香宗我部秀正様 ○秋田 山田忠雄様 ○長野 赤羽藤一様 ○室蘭 杉本喜一様 ○東京 齋藤武雄様 ○宮城 狩野正二様 ○秋田 山田正輝様 ○和歌山 久野龍太郎様 ○佐賀 富澤はな子様 ○北海道 加藤正太郎様 ○臺灣 糸川春子様 ○臺灣 池田登様

### 新しく出た本

◆赤い猫 (中野岩三郎先生著) 學校でも家庭でも、どこで讀んでも差支へない健全なそして面白い童話の讀本が長い間世の父兄達や教師達から要求されてゐました。そして其要求に應じて現れたのが本書であります。これは金の星社から引續いて出る少年少女童話讀本の第一篇でありまして、讀本として童話の書物の出版が我が日本に於てはこれがはじめてであります。本書は小學校長、教會の牧師、幼稚園主、童話作家として長い間の經驗を持たれた神野先生の非常な苦心に満ちたものであります。其價值は今更に其事新らしく述べるまでもありません。最も有益な、そして興味を盡さない機能的讀物として此の本をすべての人におすすめて致します。本書には『熊と猪』『馬の辨才天』『救難の釣手』山さちらさん、『隣の金太』『鎌倉権五郎』『武者修業』『金を掘る話』『三つの子』『馬鹿七』『赤い猫』等の面白いお話が集められてゐます。尙任岡本隆一先生の挿畫が深いついてゐます。(三五五頁、定價八十五錢、東京)

### つづれたお馬

◆つづれたお馬 (岩井元子さん著) 今年四歳になる詩才は全く奇跡と云つてもよい位です。僅か四つのお馬さんが、物に感じて無邪気に唄つた詩を、其母さんが取りかきとめて置いた、一冊にしたのが本書であります。集められた百七十餘の童話は皆、純真の情が流れてゐて、讀む人の心に深い感應を與へます。(四六版一八〇頁、定價五十錢、大阪市南區心齋橋筋順慶町北入此村欽英堂發行 振替大阪一〇三六號)

### 白秋童話(第一輯) 螢と毒

◆白秋童話(第一輯) 螢と毒 第二輯 『螢の小函』第三輯 『こんこん小山』 各輯とも北原白秋氏の童話が七八篇づつ集められてゐます。キレイな手ざわりのよい小冊子で、小杉、前川兩畫伯の挿畫も非常に面白いものです。(第版一六頁、定價各冊三十五錢、東京銀座アルス發行、振替東京二四八八八番)

### 春の序曲

◆春の序曲 (生田春月氏著) 生田春月氏の最近の詩集です。春雨がしとんと降るやうな、春の川が静かに音もなく流るゝやうな、また、人知れず咲く乙女の深息のやうな美しく、やるせないあこがれが此の詩の全篇にみなぎつて、春月氏独自の詩調が遺憾なく表現されてゐます。また此の詩集にふさばしい藤谷虹児のやさいし挿畫が深山に載つてゐます。御一讀をお勧めします。(八一頁、定價九十錢、東京市神田區仲猿樂町一七交蘭社發行、振替東京四〇二七九)





讀者だより

▼記者様、御元氣で何よりで御座います。おかげさまで『金の星』の益々盛んになることは、私等愛讀者にとりましては、ほんたうにうれしいことです。一週間ばかり前に思ひがけなくも、みぞれ雪が一尺三四寸もつもりました。屋根が重くなつたものですから、戸障子はギョッ／＼と開かなくなりまして。今になつてはもうそんなこともなくなりましたが、でも北向きの屋根にはまだ一尺ちかくもそのまゝです。ほんとに近年にない事です。(山の町より、かつひ)

▼諸先生始め社員皆様には益々御勇壯の事と存じます。私の愛する可憐な教兒たちは、指折り数へて「先生、もうあさつてもうあした」と『金の星』の到着を待つて居ります。その豊富な童話、童謡、美飾せる挿話、皆先生方の努力の結晶にして、しかも彼等兒童の心に適合せる爲でありませぬ。今勝

た。大陽の光がガラス障子をくえて勉強場をたらしめた。大陽の光で字をかき本を讀むと近めになるといふ事を先生からおそはつたので、場なかへて日くる所を見る。ほこりがうら／＼動いて居た。(名古屋市 吉本辨治)

▼『金の星』の争後以前に増し理想化して来た事は「雨降つて地かたまる」の語と同じ事です。相手の『金の星』も私は見ました。到底『金の星』の足下には及ばなかつた。きません。『金の星』の口癖、なんて美しいんでせう。毎月……に四月號のはほんとに誦方か、おつしやつた通り詩的なんです。岡本先生の繪はどうしてあんなに美しいんでせう。先生は劇をお書きになる中央會堂で聞きました。實に崇高な御方……成程と思ひました。野口雨情先生の童謡、私が歌ふ所の中に一番先生のが多いのです。それに本居長世先生の作曲は理想的でせうね。ケリム號は正に日本一でせうね。私はまだ誌友ではありませんが、いづれお仲間に入れて頂きます。(小石川 たけな)

▼記者様、御元氣で何よりで御座います。おかげさまで『金の星』の益々盛んになることは、私等愛讀者にとりましては、ほんたうにうれしいことです。一週間ばかり前に思ひがけなくも、みぞれ雪が一尺三四寸もつもりました。屋根が重くなつたものですから、戸障子はギョッ／＼と開かなくなりまして。今になつてはもうそんなこともなくなりませんが、でも北向きの屋根にはまだ一尺ちかくもそのまゝです。ほんとに近年にない事です。(山の町より、かつひ)

▼諸先生始め社員皆様には益々御勇壯の事と存じます。私の愛する可憐な教兒たちは、指折り数へて「先生、もうあさつてもうあした」と『金の星』の到着を待つて居ります。その豊富な童話、童謡、美飾せる挿話、皆先生方の努力の結晶にして、しかも彼等兒童の心に適合せる爲でありませぬ。今勝

た。大陽の光がガラス障子をくえて勉強場をたらしめた。大陽の光で字をかき本を讀むと近めになるといふ事を先生からおそはつたので、場なかへて日くる所を見る。ほこりがうら／＼動いて居た。(名古屋市 吉本辨治)

▼『金の星』の争後以前に増し理想化して来た事は「雨降つて地かたまる」の語と同じ事です。相手の『金の星』も私は見ました。到底『金の星』の足下には及ばなかつた。きません。『金の星』の口癖、なんて美しいんでせう。毎月……に四月號のはほんとに誦方か、おつしやつた通り詩的なんです。岡本先生の繪はどうしてあんなに美しいんでせう。先生は劇をお書きになる中央會堂で聞きました。實に崇高な御方……成程と思ひました。野口雨情先生の童謡、私が歌ふ所の中に一番先生のが多いのです。それに本居長世先生の作曲は理想的でせうね。ケリム號は正に日本一でせうね。私はまだ誌友ではありませんが、いづれお仲間に入れて頂きます。(小石川 たけな)

を祈ります。北海道 西塚文雄) ▼たゞ今のところ童話劇の募集はいたしてありません。(記者) ▼讀者様、私は『金の星』を毎月本屋から買ふこととして居りました。が、町から一里半もある所なので、すから買ひに行くことはなかなか出来ません。早く行くこともたうりされませんでした。などといふことは、いづれもありません。また買つて来た時は附録がないといふやうなこともありました。だから今年の一月號より本社からとることになりました。さうして一月號のおのざつては見ることは出来ないと思ひました。(北海道 松村正美)

あるのでお手紙が出しなくなりまして、どうぞおゆるし下さい。これからは、いづれもお手紙を出しませう。(本郷 吉田静枝)

▼『金の星』の頃からの愛讀者ですが、まだ一度も投稿した事もなく唯諸先生の御作をのみ拜見して、いたゞいてのみ愛読して居る。『金の星』とわが『金の星』とが分れる頃、私は涙ぐましい心になりながら世の中の内さかひに分れてから後は益々発展して行きます。私に心は今嬉しきで一杯です。此時にのぞんで、私も『金の星』の誌友の一人としていたゞきたいのです。どうか今度改正された『金の星』誌友規則をお送りして下さい。御手数ですけれど、(愛讀者)

▼記者様、私も一月號から愛讀者になりました。但し私の町の本屋からとつてはありますが、愛讀者にならなせうか。岡本第一先生の畫葉書二枚、佐久郡御牧小学校先生の父さんからいたゞきました。(田島ますみ)

▼記者様、御元氣で何よりで御座います。おかげさまで『金の星』の益々盛んになることは、私等愛讀者にとりましては、ほんたうにうれしいことです。一週間ばかり前に思ひがけなくも、みぞれ雪が一尺三四寸もつもりました。屋根が重くなつたものですから、戸障子はギョッ／＼と開かなくなりまして。今になつてはもうそんなこともなくなりませんが、でも北向きの屋根にはまだ一尺ちかくもそのまゝです。ほんとに近年にない事です。(山の町より、かつひ)



# 懸賞創作募集

## ◆少年少女の創作◆

自由畫……………山本 鼎先生選  
幼年詩……………若山 牧水先生選  
綴方……………編輯部選

〔意注〕 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりしたことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は、學校や學年(または住所と年齢)とおとさないやうにしてください。用紙は自由畫はなるだけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるだけ原稿用紙(または牛紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は四月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は六月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

## ◆一般讀者の創作◆

話……………齋藤 佐次郎先生選  
童話……………野口 雨情先生選

〔意注〕 童話は二十字詰二百行以内、童謡は十五行以内、優秀な作品は、推薦しまたは「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は、金の星賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊(參拾錢) 送料壹錢  
三ヶ月分三冊(送料共)九錢  
半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢  
壹年分十二冊(送料共)參圓六十錢  
但し四月號九月號は特別號で卅五錢新  
この分だけ必ず加へてお拂込み下さい  
振替口座東京五九五六六番

〔意注〕 御注文は必ず前金で御拂込み下さい  
送金に康替が一番便利で御座います  
の切手代用は、壹錢切手一割増して下さい  
▽第何巻第何號よりと書いてください  
▽住所姓名は必ず書き添えてください  
廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十二年四月六日印刷納本(毎月一回)  
大正十二年五月一日發行

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎  
印刷所 東京市小石川久野町八百八番地 大橋 光吉  
印刷所 東京市小石川久野町八百八番地 廣田 博文館印刷所  
發行所 東京市外田端三百五十一番地 金の星社  
振替口座東京五九五六六番  
電話小石川五三九七番

## 少年少女童話讀本第一編(三版)

沖野 岩三郎 先生著

# 赤い猫

定價 五十八錢  
送料 二十錢

「赤い猫」の評判はすばらしいものです。日本ではじめて出来た童話讀本だけに、學校からも家庭からも大好評を以て迎へられてゐます。少年少女の課外讀本として今のところ、これ程優れた本はありません。第二編の「かくれ蓑」も近い内に發行になります。

野口 雨情 先生著

# 童謡十講

定價 壹圓十八錢  
送料 四十錢

童謡は實に盛んです。それなのに童謡の研究書は長い間適當なものがありませんでした。しかし野口雨情先生の「童謡十講」が現はれたので、研究者は大喜びです。最早三版も盡きようとしてゐます。

東京野口公園前 金の星出版部 振替東京五九五六六番 電話一〇七二八番



沖野岩三郎先生作 ◇ 岡本歸一先生裝畫

# 長篇 物語 父戀し

初版再版忽ち賣切れ、遂に三版が發賣されました。少年少女名作物語りの第一篇として賣出されたる『父戀し』は全く飛ぶやうな賣れ行きです。

定 價 壹 圓  
 ◇送 料 十 錢◇  
 ◇本 箱 判 六 四◇

## 金の星童謡曲譜集

◆本居長世先生作曲  
 野口雨情先生作  
 岡本歸一先生裝幀

各冊六曲入り  
 定價金六十錢  
 送料四錢

第一輯

人買ひ船

再 版

第二輯

再 版



四九

東 上 京 野 公 國 下 前 谷 部 版 出 星 の 金 振 替 東 京 一 六 七 一 〇 一 番 振 替 電 話 下 谷 六 八 二 三 番



紅い林檎

「チョンは朝風くから山の上の檜林へ行つて待つて居ると、昨日の三十四正は二隊に別れて東の峰の方から、落葉を踏み乍ら、ぞろ／＼とやつて来ました。一隊の十七正は法性院が引率し、別の二隊十七正は吉水院が引率して来ました。そして今日は山奥を出る時練習して来た見え、二隊は能く引率者の命令をきいて、番號も間違ひなく言ひました。それを見たチョンは、

「よく出来ました。其の順で十日もお稽古をすれば、直ぐ狼の兵隊さんが出来ますよ。」と言ひました。

「兵隊さんといふのは、どんなものですか。」

法性院は不思議さうに尋ねました。

「兵隊さんといふのは、此の日本中に何人ほどありますか。」

「さア、何人あるか知らず。僕が見たのは百人程だったが、皆な圓い帽子を冠つて鐵砲を擽けてゐました。多分兎でも捕りに行くのだらうと思ふが……。」

「兎を？ 兎を捕つてどうするんだい？」

「勿論、兎の皮を引剥いて、それで耳袋といふものを作つたり、其の肉を刻んでお鍋といふものへ容れて、炊いて食べるんでせうよ。」

「まア、人間はそんな慘酷な事をするんですか。」

「えエ／＼人間は、そんな事は平氣でやりますよ。」

チョンがさう言つた時、吉水院は、嫌な顔をして齒齧を剥出し乍ら、

「もう、そんな話は止して下さい。それよりも、此間聞きかけた、あの定九郎先生の話の續きを聞かせて下さい。」と申しました。

法性院も齒齧を見せながら、

「さう／＼、あの定九郎先生は、それからどうなりました？」と訊きました。

「では、あの話の續きをお話し致しますせう。しかし、私がお話を始めます前に、一つ



お経を唱へませう。」と、チヨンが言ったので、三十四疋の猿は「お経を唱へる」と云ふのは、どんなことだか知らないで、皆な嬉しさうな、又た心配さうな顔をしてゐました。

「お経を唱へるといふのは、どんな事ですか。」と吉水院は問ひました。

「私の言ふ通り、三回繰返して一緒に言ふんです。さア皆さん一緒にオッしやいー」

チヨンは起上つて、大きな聲で、

「神は天地の主宰にして、猿は萬物の靈なり！」と唱へますと、皆な聲を揃へて、其の通り三回唱へました。

「では、此間お話致しかけた定九郎先生の續きを話させよう。」と云つて、チヨンは、こんな事を語りました。

「定九郎先生は、羽二重の紋服を着て、腰に刀を落しざしにさしたま、頭にはチャゴチャゴな鬘を冠つて、電柱といふ木と木との間に引張り渡してある鐵線を傳つて、或る山の麓へ着きますと、向ふの方に、ちやうど人の形が見えらるのです。さては此



邊に人間が棲んで居ららしい。人間が居るなら、程度食物もあるだらうと思つて、光りの方へ行つてみますと、家があつて家の後には大きな大根と胡蘿蔔とが乾してあつたさうです。それを見た定九郎先生、早速その大根と胡蘿蔔とを、お腹一杯

食べて、家の窓の所から室の中を見ますと、驚くぢやありませんか、其所には人間が三十人ばかり、すらりと並んでゐたのです。これは大變だ！と思つて逃げ出さうとしましたが、よくよく見ると、其の人間共は、鐵砲も刀も持つてゐないので、ヤツと



安心して、恰度窓の所に枝を伸してゐる梅の樹に登つて、ちツと中を覗いてみますと一段高い所に兵隊の着るやうな洋服を着た、顔の圓い、色の白い、口の少しく大きい男が立つてゐて、ほつりく〜と一冊の書物を披いて読み初めたのです。定九郎先生、耳を傾けて聞いてみますと、どうも能くは判らないが、何でも猿の事を書いた書物らしいのです。も一度始から聞きたいものだと思つてゐると、一人の若い男が、

（先生、も一度お読み下さい！）と言つたので、先生と呼ばれた男は、一段聲を張上げて、（では、解り易くお話し致します。史記といふ書物に、楚人ハ猿猴ニシテ冠スルノミと書いてあります。夫れは楚の國の人間は馬鹿だから、丁度猿に人間の着物を着せたやうなものだ、といふ事です。全體猿といふ奴は人間よりも、毛が三本足りない辭に、吾々人間の眞似をしたがる奴です。だから人間でも他人の眞似ばかりしてゐる人を猿智慧のある奴だといふのです。又た猿眞似とも言ひます。けれども此の猿は吾々人間の先祖です。吾々の先祖も一度は猿であつたのです。夫れが段々進化して、今日の人間のやうに立派な動物の靈長となつたのです。）

先生が得意になつて、さう言つてゐるのを聞いた定九郎先生、最初の程は、馬鹿に腹を立て、ゐるが、段々と話を聞いてゐると、猿は人間の先祖だと言つたので、（こいつ、面白くなつて来たぞ！）と思ひ乍ら窓の中を見入りました。すると一人の若い娘は起ち上つて、

（先生、一寸お伺ひ致します。先生は此間 私共に祖先崇拝をしると仰しやいました。それでは私共は、私共の先祖である猿を拜まねばならないのですか。と問ひました。それを聞いた先生は、點頭いて、

（勿論さうです。昔々其の昔、猿の中に一疋の賢い猿があらまして、神様の所へ行つて、神様、私はもう猿が嫌になりました。どうぞ猿よりも、もう一段偉い種族に級第させて下さいとお願ひ致しました。すると神様は直ぐ、宜しいと仰しやつて、其の猿を人間の男に進化させました。所が唯ッた一人では淋しからうと仰しやつて、其の男の眠つてゐる間に、そツと腋腹の骨を一本抜き取つて、一人の女を造りました。そして其の男と女とに、名前をつけたのです。男の名をアダム、女の名をイヴと云ふので



した。二人の人間は大變喜んで、神様の所へお禮に行きますと、神様はニコ／＼お笑ひになつて、

（お前達は、人間になつた事が、そんなに嬉しいか、人間と云つた所で、猿より毛が三本多いだけだよ。そんなに偉いものではないぞ。）と、仰しやいました。するとアダムは、

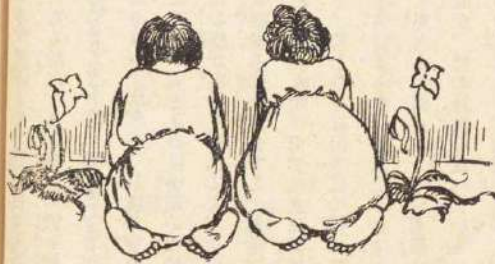
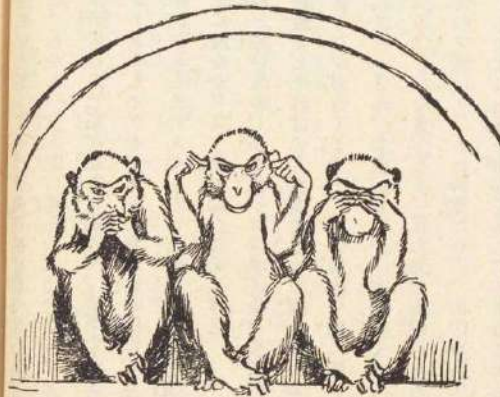
（神様、私共はこれから屹度偉い者になります。もう二度と猿のやうな詰らない畜生などには墮落致しません。屹度學を修め業を習つて、智能を啓發します。公益を擴め世務を啓きます。）と申しました。

そこで神様は、アダムとイヴの言ふ事が果して本當であるか、それをお試しになる爲め、二人をエデンといふ大きな公園へ伴れて行きました。公園の中には大きな林檎の樹があつて、其の枝には何百といふ澤山の實があつてゐました。神様は此の二人に對つて、

（私はお前達が人間になりたいと言ふから、人間にしてやつたが、萬一にも元の猿に

なりたいたいと思ふなら、此の林檎の實を食べるが善い。さうすると元の猿に還る事が出来る。しかし一旦人間に進化したのだから、元の猿になる時は、あの向ふの霞ヶ關といふ所にゐる三正の猿共に頼んで、お許しを得なければなりませんよ。）と申しました。所がアダムもイヴも、もう二度と元の猿になる氣はありませんから、林檎の實などは振向きもしませんでした。所が或日の正午頃でした。アダムとイヴは公園の中のベンチに腰をかけて、歌を唄つてゐますと、イヴは急にお腹が空いて來たので、（あたしお腹が空いてよ、何か食べたいワ。）と云つて、不圖音樂堂の傍を見ますと、其所の林檎の實が、それは／＼美しく眞赤に輝いてゐるぢやありませんか。で、イヴは神様の言葉なんか忘れて了つて、其の林檎の樹に駆け登つて、旨しさうなのを二つ捲つて來て、（アダムさん、お食べなさい。大變旨しさうよ。）と言ひました。するとアダムは、（だつて、これを食べると、又た元のお猿になるよ。）と申しました。（いゝワ、お猿になつたつて宜いワ。あれ御覽なさい、あの草叢の中の蛇が、此の林檎を食べたいと云つて、あんなにお舌を出してゐるぢやありませんか。あの蛇なんか、まだ足も手も無い





でせう。あの蛇がお猿に進化するまでは、何百萬年かゝるが解らない事よ。蛇は何ほお舌を出したつて、此の林橋は食べられないんですもの。世の中には蛇のやうな野蠻な未開な動物もあるんですから、私、お猿に退化したつて宜いワ」といつて、イヅはがぶり！と林橋を一口囓りました。

イヅの白い歯が、紅い林橋の皮を破つた時、中の眞白い果が見えました。イヅは頓狂な聲で「まあ！ 旨いこと！」と叫びました。するとアダムは堪らなくなつて、「僕にも一つ呉れろ！」と言つて、イヅの左の手に持つてゐた林橋を引つたくつて、それを食べました。さア大變です。神様が其所へ現はれて、

「林橋を食べたナ。では今日から元の猿に退化したんだから、此の公園に居る事は相成らぬ。早速向ふの霞ヶ關へ行つて、三疋の猿に頼んで、元の通り猿の仲間にして貰ひなさい」と申しました。

其時二人は、矢張り人間のまゝで居たかつたのですが、もう林橋は食べて了つて、お腹の中に入つて了つたのですから、どうする事も出来ませんでした。で、泣々神様



六〇  
にお暇乞をして公園を出て、霞ヶ關へ行つてみますと、其所には三疋の大きな猿が坐つてゐました。けれども右の一疋は両手で眼を押へてゐます、左の一疋は口を押へてゐます、真中ののは両方の耳を堅く押へてゐました。だから二人は、其前に行つて、「どうぞ私達を元々通り、あなた方の仲間にに入れて下さい」と言つて、丁寧に頭を下けて頼みましても、右の端に居る猿は、

「あなた方の仰しやる事は、能く聞えますが、私は眼を塞いでゐますから夫れを許してあけて、宜い人間だか、どうだか、見なければ解りません」と申しました。左の猿は、耳は聞え、眼にも見えますが、口を塞いでゐるので、何ともお返事が出来ない。見え、黙つてゐました。真中の猿は、両方の耳を押へてゐるので、二人が何を言ふのか解らないから、きよんとして二人の顔を見詰めてゐました。

アダムとイヴは三日三晩其所で頼みましたが、三疋の猿は、何とも返事をして呉れませんから、致方なしに、元の公園へ歸らうとすると、公園の入口には、いつの間にか大きな石の罫が据付けてありましたので、二人は其所を揺返りく速い公園へ來





たのでした。それから二人は人間の國を開いて人間の先祖になつたのです。だから、人間は、先祖の猿を拜んでゐます。何所へ行つても、道の辻々に庚申様といふ石地藏のやうな偶像が立て、あつて、それは申神様といつて、庚申の日に、人間は其の三元の猿を祭るのです。其の猿を「言はざる、見ざる、聞かざる」と言ひます。これ即ち人間の祖先崇拝ですと、先生は申しました。すると一人の若い男が、怒つたやうに立ち上つて、

「先生、そんな馬鹿な事はありません。」と喚鳴りました。

其時梅の枝にゐた定九郎先生は、家の中で長々しい演説をした先生が、最初は猿をけなしてゐたが、お終ひに猿を人間の先祖だと云つたので、急に其の人間の先生を尊敬したくなつて、

「さうだ、先生の言ふ通り、猿は人間の先祖だ、君達は僕を拜まねばならないぞ！」と言ひ乍ら、窓を開けて、ひよつこりと室の中へ飛び込んで、演説をしてゐた先生の肌の上に、ちよこなんと坐りました。

室の中にある人間共は驚いたの驚かないのつて、ゴチャ／＼の聲を冠り、羽二重の紋付を着て、朱袴の大小を腰へ落しさしにしてゐる定九郎先生が、大きな口を開けてきい／＼言つたもんですから、人間共は、きやッ！と泣聲を立て、皆な轉び乍ら逃げ出してしまひました。

楚人ハ猿ニシテ冠スルノミ……と言つて、さも偉さうに威張つてゐた先生も、定九郎先生が飛び込んで来たのを見た時、吃驚仰天して、一番真先に窓から外へ飛び出して、石垣で頭を打破つて死んで了つたといふ事です。

「チョンは然う言つて、氣の毒さうに肩を寄せて俯向きました。」

「では矢張り人間よりも、吾々の方が偉いのかなア。」と法性院は頭を撫で乍ら言ひました。

「それは、今更言ふまでも無い事です。吾々は萬物の露長ですもの。」と吉水院は自慢らしく言ひました。

「それから定九郎先生は、どうなりましたのです？」





# 三越の子供服

子供服は四階にあります

三越の子供服は、型が新らしく丈

夫で値段が安いので大好評を博し

て居るので御座います。子

供用帽子、襯衣、靴下は四

階に御座います、子供用靴は

三階の靴部にあります、尚ほ

五月八日からは、本年新流行の品を集め

て、子供服陳列會を賑々しく催はします

地方からの御注文は寸法とお値頃を明記

の上、通信販賣部へ御注文を願ひ上げます



## 三越呉服店

東京市

駿河町

◇ 日五十二日十は日休定の月五 ◇

吉水院の隣にゐた青蓮院は小さい欠伸をしながら言ひました。

「定九郎先生は、人間共が先祖を拜むどころか、猿の顔を見ると、死物狂で逃げ出したのに呆れ返つて、馬鹿！」と嗷鳴つて置いて、其の家を出たのださうです。それから又た電柱の木と木との間に張り渡してある、鐵線を渡つて、すんくすんくやつて来ると、今度は廣い町に出て来たんださうです。町と云ふのは人間が何百人も住んでゐて、家の澤山ある所ですよ。」

「さうですか、夫れから？」

「夫れから、此の町中に大騒動が起つたのです。」

「騒動？ どんな騒動が？」

青蓮院は、早く其次のお話を聞きたいやうに尋ねましたが、丁度其時、與兵衛爺さんが、庭の所で、ちやアん、ちやアん、と拍子木を打きましたので、チヨンは周章て枝を跳び降り、「左様なら皆さん、僕は御飯を食べに歸ります。又た明日……」と云つて、家のかへ起つて行きました。



まあ何といふ佳い匂でせう。  
まあ何といふ涼しい味でせう。

いつ使つてもしんからせいせいするのは

## ライオン煉齒磨

チューブ入です

朝ばかりでなく夜おやすみになる前も  
忘れずにお使ひになればお齒はきつと  
強く美しくなつて學校はいつも優等です。

